

古史傳

自第八十九段
至第九十三段

十八

和書門	
四二五九號	類
一三一函	
一三架	
二七冊	

內閣文庫	
四二五九號	和書類
一三三函	
一三架	
二七冊	

內閣文庫	
番號	和 94
冊數	27 (18)
函號	140 184



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM, Kodak





古史辨十八卷

九四

神代中十卷

平島

男



故是大國主神平國坐時到坐

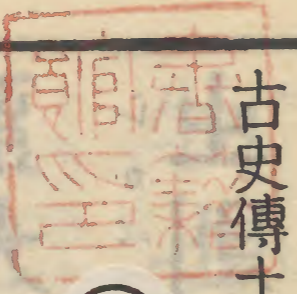
出雲國伊佐佐坐小汗而為御

食出時海上有人聲故驚而求



九十八

古史傳十八出卷



和九四 號

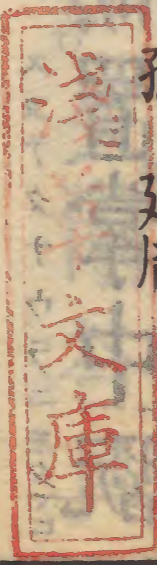
神代中十出卷

平篤胤謹撰

町田久成獻納之章

男 鐵胤

孫 延胤



故是大因主神。平因出時。到坐

出雲因伊佐佐出小汀而爲御

食出時。海上有人聲。故驚而求

古史傳十八

一

出。都不見物。頃時。而甚小神。自
波穗。乘天出。蘿摩船。而以佐
伎羽。爲衣服。隨海水。而漸浮到
焉。大國主神。卽取而置。掌中翫
出。則跳而齧其頰矣。故以爲怪

物也。雖問其名。不答。且雖問所
從出。諸神皆白。不知矣。爾谷具
久白云。此者久延毘古。必將知
焉。白則卽召久延毘古。而問出
時。此者產巢日神。出御子。少毘

古那神也白矣。

コナノカミナリトマヲレキ

伊佐く出小汀を。出雲郡ふある濱あり。はと伊那佐之小汀とも。伊多佐之小汀とも云。委く下ふ注ふ。第百十五段の傳見

○爲御食之時。美衰志世須時爾と訓べし。本は時と依るを師の訓よ。○海上を和多能閉せ訓は。宇那婆羅とを訓ま

とぞ。○有人聲故。人聲世禮婆と訓はし。此は師の訓

○求之都不見物は。美給布爾都爾物毛美延受と訓べし。此も師訓よ依り甚小兒故。聲はみして物を見えざ依て文を成せ也。

○波穗を。師云万葉十四よ。奈美乃保能伊多夫良思

ル也。

毛與。波穗之甚。也。有。小。依。て。訓。べ。し。末も拔十掬劔而逆刺立浪穗云。御毛沼

命者。跳。波。穗。云。神代紀。下。よ。於。秀。起。浪。穗。之。上。起。八。尋。殿。云。

云。秀。起。此。云。左。ま。と。神。武。天。皇。紀。ふ。浪。秀。と。あり。凡。て。穗。と

は。著。く。顯。ま。見。ゆ。る。事。を。云。て。波。穗。を。書。紀。よ。秀。起。と。あり

如。く。左。伎。を。花。の。咲。お。ど。此。左。久。あり。万。葉。十。四。よ。左。久。奈。美。也。も。と。免。也。浪。の。白。く。高。く。立

さ。海。を。云。ふ。古。言。あり。○。自。は。次。の。淨。到。と。云。文。よ。係。て。見

ば。し。浪。上。ま。と。云。ま。や。れ。ゆ。自。船。自。徒。あ。げ。の。自。あり。○。天

之。蘿。摩。船。天。之。也。云。は。天。之。蘿。天。之。眞。拆。あ。ど。此。例。也。○。天

諸。本。ふ。け。を。無。れ。ど。延。佳。本。ふ。依。て。加。牙。書。紀。ふ。を。以。白。藪。皮。爲。舟。と。あり。本。草。和。名。よ。蘿。摩。子。和。名。加。く。見。と。見。え。

ヤクキは鴝鳥豆久仁德天皇此大御名を古事記ふ。大雀
命と書とまぞ。書紀ふを大鷓鴣と書とめ。此を記す。雀字
を書ゑるが誤。あゆ由を。知し。失むや此事と思はる。此御
由縁の故事を思ふ。宗り鷓鴣と通えたり。然まぞ。纂疏
書紀よ。雀字を。佐く。支と訓る所もあるハ誤あり。纂疏
ふ。鷓鴣俗云美曾佐く伊是也とめ。今も然云鳥れ。名
義を。谷川氏此。佐く。木稱其小也と云。あ如く。宗ふ是はり
也。小鳥は無れ。佐く。伎と云る。れらむ。美曾佐く伊と云
る。此鳥溝。辺籬の下あぞ。小虫を求る鳥あま。云る
ふ。是ふ就て前。思。牙。あ。鷓鴣鳥。加夜久。伎と云は。萱
漏と通。ま。む。佐く。伎とハ。筵漏の義。あ。ちて。此を古事記
らむ。う。と思ひし。う。ぞ。其を。わろ。か。め。き。ちて。此を古事記
ふ。は。内。剥。鵝。皮。剥。爲。衣服。と。あ。也。鵝。ハ。決。然。多。鷓。字。誤。れる

れ也。ま。若。く。也。鵝。字。を。佐。く。伎。の。事。と。思。ひ。紛。り。て。當。と
る。ふ。も。有。は。し。然。ま。む。縣。居。翁。此。佐。邪。伎。と。訓。れ。と。る
を。當。ま。り。然。る。を。記。傳。よ。佐。邪。伎。あ。ら。む。書。紀。の。如。く。羽。と
こそ。云。は。る。皮。と。云。む。こと。鳥。ハ。似。あ。う。は。し。か。ら。は
と。て。蛾。字。の。誤。也。あ。て。比。牟。志。を。訓。○。掌。中。は。舊。訓。ふ。多。那
て。解。ま。し。説。を。却。也。多。信。が。と。し。○。掌。中。は。舊。訓。ふ。多。那
宇。良。と。訓。る。ふ。依。べ。し。手。裡。あ。也。手。心。と。云。も。同。じ。義。あ。也。
○。翫。之。則。見。給。比。斯。加。婆。と。訓。は。し。字。ふ。隨。ひ。て。毛。氏。阿。曾
夫。と。訓。む。也。漢。籍。風。の。訓。あ。也。○。頰。を。和。名。抄。よ。豆。良。保。云
也。有。也。齧。ハ。俗。ハ。齧。付。れ。り。此。を。下。ハ。産。靈。神。の。御。語。ふ。不
順。教。養。云。く。と。詔。牙。る。神。性。れ。也。然。る。を。大。国。主。神。此。輕。慢
は。云。あ。ぞ。釈。説。と。○。所。從。之。諸。神。ハ。師。云。美。登。毛。能。神
も。は。聞。あ。く。も。煩。さ。し。○。所。從。之。諸。神。ハ。師。云。美。登。毛。能。神
多。知。と。訓。は。し。大。国。主。神。の。御。從。者。あ。也。○。谷。具。久。は。本。ふ
多。迹

且久とあり師説よ依て且を具
の誤あることを知て改免於
能佐和多流伎波美云く六小谷タニグ潛乃狹渡極ワタキハミ云く祈年祭
詞小谷蟻能狹度極レ月次祭詞
あど何れ此を蟾蜍ヒキのあと
よて祝詞よ蟻と作とるを蟻蟻よてそハ只此加閉流あ
れむ比伎賀閉流とを別れらるが如くあまども古通
はし云ふこと漢籍ふも多しま祝詞の今本よ蟻を加
麻と訓まど字音あまむ誤あり縣居翁此具久と訓れと
るが當れること万葉具久を鳴聲ふとま依名谷タニ云は
と照していちちるし
物のほざはる居物あ依故あて久くは蛙の類此總名よ
う。○今云和名抄よ唐韻云蛙蟻也蟻和名賀閉流まよ青
蝦蟇兼名苑云蟻蟻大而青脊謂之土鴨蟻和名阿平加閉流
まよ兼名苑云蟻蟻似蝦蟇而大陸居者也蟻和名比木と何
正今按ふよ蟻蟻を具久と鳴物よ非矣青蝦蟇を田沼谷
相あど居て常よ具久を鳴物あり師説の如く鳴色よ
依て名けむりハ是ぞ谷具久と云べき物あり山田此曾

富騰のよとを云るも田よ居る青蝦蟇ぞ由有てきこと也
然まど聖異わざあ依物を蟾蜍あり此をあ不熟考ふべ
しさて總て加閉流は小虫を吸取て食ふ物あり中此
小蟾蜍を引息のあよき故よ比伎と云云形るべし此
物の靈異クシキ己ざある事は漢籍小も見え世人も知れる如
くおれむ今此の事も由何正て所思也オホ本朝文粹村上天
皇御製古調詩よ
又野有異躄者名号為最明野誰得辨蝦蟇尤耐驚とある
此野躄者對句此意を按よかの異躄者の形狀野躄
蝦蟇よ似よりかる者を誰うを辨と云とも誰う見てを誰も
驚き於べしと云意り又は野躄と云とも誰う見てを誰も
知む蝦蟇も此を見む驚くべしと云意り若後の意あら
む野躄者物字とく辨子知る物よして詔子るれま
ば此由何り○今云野躄を何物と云こと未見當らば
野躄の名を野躄と申はとハ別あり出羽此秋田あど
野躄と稱ふ物あり己いはど其形を見ぬと見ぬと見ぬと
言を聞く形槌の如くあて目口を何まど尾も頭もあ
き物よて蛇れ類と見ゆる人を見ぬは草村をり急よ
出て蜻返す追於免て齧付むと見ぬは草村をり急よ

と有とい予正御製の野鏈を此あらむらまの蟾蜍の大
あるを背の徑一尺むりぬるも珍あらばとぞ此も甚
大きぬ依は頭をり背ふ長き毛生て立歩ぬ赤子の如き
芭をあして人を欺きほと人家よ礎あどを打ことも有
正あう大丸く成れるをむ禿切と云ぬり此も己む見後
ど能知ると人の物語あまバ因ふ此り記し出於まと按
ふよ徒然草よ野鏈と云見え新撰字鏡よ蠍蟹○久延毘
乃豆知まと蝮蜻也乃豆知と有り考合去べし

古名義次小注去ほし師云神名式ふ能登固能登郡ふ久
氏比古神社何正氏字若ハ延の誤よを非るう廻固雜記
と云物よ能登固ふ至り云くくゑのや
扱と云所よてとぬる心のらうきにまひよもあれぬら
むやちよび何をくゑの里人とゑるを見れぬいよく
久氏を久延の誤うとわぶ也同郡ふ宿那彦神像石神
とひ氏ふても延と同韻あり

社と云も見也今云ま隣郡羽咋郡よ大穴持神像石神
社と云もあ正て清和天皇紀よ貞観二年
六月九日能登固大穴持神宿那彦神像石神
二前並列於官社やあれむ信り由有げあり○召久延毘

古而云く次小此神者足雖不行云くと云おく此小召を
云こと心得がと死よ似とれど謂ある事お正次よ云ほ
し○産巢日神此古事記ふ神産巢日神とゑ依字あぐ
産巢日神と書るは書紀ふは高皇産靈尊の子とも有て
家を男女二柱の皇産靈神此産靈此御間小生坐る故ふ
ちう二方小語傳あるあまむ二神を兼てかく文と依あ
正委くを既よ云予正死第一段の傳見べし○少毘古那神此御名
本小少
名とあるを書紀ふ少彦名神と有
るよ依て少の下此名字を畧き扱師云名義少は書紀此
纂疏ふ以形體短小爲名とゑ正然も有べし須久那志と
は後世よはあぐ多死よ對予て物の數小此み云予ぢも

古は大小對子て。小兒あともも云也。万葉ハ小彦名と
もかけ也。官職もも。大少あてて大を。ちて毘古も那毛。例
此美稱あり。神名式小。越前。圀坂井。郡。比古奈。神社と云
建猪心。命と申。御名もあり。まよ
宿奈麻呂てふ人。名も何依あり。

故爾遣使而。白上於神產巢日

御祖命則詔曰。此者實我子也。

吾所生子。凡有千五百座。其中

最惡而不順教養。自吾手俣漏

墮出子也。愛養而與汝葦原醜

男命。爲兄弟而宜作堅其圀詔

矣。故少毘古那神。亦謂手間天

神。亦謂小名牟遲神。乃

ムスビノカミノミコノカミナリカレアラシマラセルコノ
産巢日神出長子也。故顯白此

カミヲユルイハクエビコハニイマイフヤマ
神所謂久延毘古者。於今云山

ダノソホドトモノナリコノカミハアレハドモ
田出曾富騰者也。此神者足雖

アルカネコトぐニシレルアメノシタノコトヲカミナリ
不行盡知天下出事神也。

遣使^{ツカヒ}ヲ使^{ツカヒ}乎麻陀須^{マダス}と訓^{ツカヒ}也。遣^{ツカヒ}を麻陀須^{マダス}と訓^{ツカヒ}む由^{ツカヒ}也。第^{ツカヒ}
百四十六段奉出^{ツカヒ}の処^{ツカヒ}に注^{ツカヒ}
○神産巢日御祖命皇産靈神二柱坐^{ツカヒ}及び中^{ツカヒ}に神産巢

日命^{ツカヒ}を女神^{ツカヒ}小坐^{ツカヒ}て内事^{ツカヒ}を掌^{ツカヒ}給^{ツカヒ}ふ故^{ツカヒ}也。此^{ツカヒ}神^{ツカヒ}小^{ツカヒ}白^{ツカヒ}上^{ツカヒ}給^{ツカヒ}ふ

あり。○白上^{ツカヒ}師^{ツカヒ}云^{ツカヒ}白^{ツカヒ}は右^{ツカヒ}の状^{ツカヒ}字^{ツカヒ}云^{ツカヒ}くと白^{ツカヒ}は^{ツカヒ}あ^{ツカヒ}る^{ツカヒ}上^{ツカヒ}を少^{ツカヒ}
毘古那神^{ツカヒ}を高天原^{ツカヒ}小^{ツカヒ}率^{ツカヒ}て詣^{ツカヒ}て御祖命^{ツカヒ}の御許^{ツカヒ}に獻^{ツカヒ}る

を云^{ツカヒ}。下文^{ツカヒ}御祖命^{ツカヒ}の詔^{ツカヒ}よ此^{ツカヒ}者^{ツカヒ}案^{ツカヒ}云^{ツカヒ}くと詔^{ツカヒ}ふ也。彼^{ツカヒ}蓑雲^{ツカヒ}劍^{ツカヒ}
を白^{ツカヒ}上^{ツカヒ}於^{ツカヒ}天照大御神^{ツカヒ}とあり^{ツカヒ}る^{ツカヒ}も同^{ツカヒ}じ。彼^{ツカヒ}も上^{ツカヒ}は即^{ツカヒ}其^{ツカヒ}太刀^{ツカヒ}

を獻^{ツカヒ}る^{ツカヒ}残^{ツカヒ}云^{ツカヒ}也。俗^{ツカヒ}よ多^{ツカヒ}く白^{ツカヒ}は^{ツカヒ}こと^{ツカヒ}を申^{ツカヒ}し上^{ツカヒ}と云^{ツカヒ}と。○實^{ツカヒ}
を久延^{ツカヒ}毘古^{ツカヒ}也。云^{ツカヒ}く白^{ツカヒ}せる^{ツカヒ}を如何^{ツカヒ}と使^{ツカヒ}神^{ツカヒ}の白^{ツカヒ}は^{ツカヒ}を承^{ツカヒ}

て。案^{ツカヒ}よ然^{ツカヒ}れ^{ツカヒ}ゆと詔^{ツカヒ}ふ^{ツカヒ}あ^{ツカヒ}る^{ツカヒ}也。○手^{ツカヒ}俣^{ツカヒ}也。師^{ツカヒ}云^{ツカヒ}縣^{ツカヒ}居^{ツカヒ}翁^{ツカヒ}也。多^{ツカヒ}那^{ツカヒ}
麻^{ツカヒ}多^{ツカヒ}と訓^{ツカヒ}也。多^{ツカヒ}る^{ツカヒ}小^{ツカヒ}依^{ツカヒ}法^{ツカヒ}し。本^{ツカヒ}よ多^{ツカヒ}能^{ツカヒ}麻^{ツカヒ}多^{ツカヒ}と訓^{ツカヒ}み。ま^{ツカヒ}と書^{ツカヒ}

所^{ツカヒ}も^{ツカヒ}あり^{ツカヒ}。那^{ツカヒ}也^{ツカヒ}之^{ツカヒ}も同^{ツカヒ}じ。手^{ツカヒ}心^{ツカヒ}手^{ツカヒ}裏^{ツカヒ}手^{ツカヒ}末^{ツカヒ}あ^{ツカヒ}ど云^{ツカヒ}例^{ツカヒ}あ^{ツカヒ}る^{ツカヒ}也。さ

古事記中の俣字延佳本よと、安佳て股と作也。あをの古書
あらま改、おるあり。俣を字書ハ見え、改、此方の古書
書來れり。改むべきよ非、此外も漢圀ハあき字、あき有
まども、何らぬ意、お用ひとる。○漏墮之子。古事記ハ久
伎斯子と何也。今、書紀ハ漏墮とある。師云、漏は上よも
大名牟遲神の事字。自木俣漏、逃而去と云、予ゆ、万葉十、
伯勞鳥之草具吉十七。保登等藝須木際多知久吉、あきと
波流乃野能之氣美登妣久、鶯云、あきあ、久具流と
云也。此久、を延とる言、あき久、伎久、具理と云、あき
あ也。此の文、宋我子也云、と、あ、あ、の間、三とび重
と思ふ。入、此、かく、同言の重、あ、あ、字、バ、拙し。○汝と指て詔
や、あて、省、く、中、く、よ、古、さ、ま、あ、あ、ら、び。

ふは。此時大圀主神も、共よ參上給、予るが如く、あきと、使
あても。如此、詔、ふ、あき、あ、也。○兄弟。此も阿彌於登、せ、訓、へ
し。兄弟と何也。心を睦、び、力を戮、せてと詔、ふ、也。後、世、よ、
ち、兄弟、を、為、こ、と、何、る、字、義、兄弟、と、云、此、を、産、靈、神、の、始、め、
て、命、せ、給、へ、る、事、あ、ま、む、心、ど、よ、と、く、一、あ、バ、最、宜、き、事、よ、
ぞ、有、也。○宜、作、堅、其、圀、とは、師、言、此、如、之、天、地、初、發、之、時、よ、天、
神、の、詔、以、て、伊、邪、那、岐、伊、邪、那、美、神、よ、修、固、成、是、漂、在、圀、と
あて、天、瓊、戈、字、賜、予、ゆ、也。斯、て、豫、美、圀、段、よ、吾、與、汝、所、作、之、
圀、未、作、竟、云、く、と、何、る。其、未、作、竟、給、さ、る、所、を、作、堅、免、て、功、
を、竟、と、何、也。師、云、今、かく、少、毘、古、那、神、を、副、て、助、け、し、也、
給、ふ、也。彼、沼、乎、を、賜、ひ、し、と、同意、よ、て、深、き、所、以、あ、る、也、也、

其国とは高天原を也。此国を指依御言れ也。神の詔りハ
是を有る也。そののみ天地相去味。遠故よ御目此あり故あり。○手間天神也。大三輪
神鎮座記よも此と同傳を記して。此故傳曰手間天神也
と有る也。と。徴も云依り如し。御祖命の御手此間をり
漏墮とる天神よ坐ば也。まよ是よ就て按ふよ間を麻
間。然るを間と云語を彼と此を此。出雲国意宇郡筑野村。
間瀉の海中よ小嶋あり。手間嶋といふ。此嶋よ手間天神
社と云有也。祭神を少彦名命也。書等よ見えと也。俗
誕りて天神と濁りて唱乎菅原大臣社と思ふとぞ。杵築
大社記よ此島を蓬萊とも云べき風景あり。毎年除夜
此大海の無量此島賊魚也。此島の辺乎集まるを此浦
此漁人ども網を曳てとる。此神此祠へ参詣遂とる魚也。

背上よ黒点あり。参詣遂ざ依り黒。○小名牟遲神。其の御
点あり。是あま祢く知る所あり。名も。徴も云る如く。戒壇院神名帳よ。大汝小汝明神と有
依を採ま也。大名持神の御名を万葉六行ハ大汝を也書
大名牟遲の大名よ對行て。小名と申せ也。然まむ須久那
云。後き名約とるあり。凡て同音の。ちて上よ。皇産靈神の
重おれる言ハ。一於畧く例多し。
御詔よ。爲兄弟とは有まど。誰う兄。誰の弟と云よ。也。知ら
まざ依を。此大名小名を申以御名よ依てぞ。兄弟此事の
詳よ。知ら依り也。大兄少兄の義を○少御神。此御名也。
息長帯日女命の大御歌よ。須久那美加美と。御詠ませる
を採ま也。下よ引く万葉七の○産巢日神之長子。長子也

美古能加微と訓るし。御子之上に義あり。書紀に所く小
長子をかき訓べ。傳に注せるを見む。はて此傳に神祇譜
天圖記に大己貴神與產靈神之長子。少彥名神共經營天
下云く。と有を採れると。既に徴ふ云ふに。右文に神名
依を此に用あはれ。此に他の書等に見ざる。最も妙
なる正し死傳あり。其由次第に注ふを見ざる。○顯白と
は。誰も知ざしを。よく見知りて。其と顯はし申せしを云
末下ふ。此立御前而仕奉之。猿田毘古大神者。專顯白之。汝
送奉ともあり。此に依て思へば。神名を更にもいへば。人
好徳を為とる。○山田之曾富騰師云。あく此文を按ふ。
ものありなり。

當時久延毘古と云し。即今世に至るまで。山田に曾富
騰とて有物是あり。云意あり。然るに久延毘古。即ち
曾富騰。後の歌に曾富豆とてある物あり。清輔朝臣の
奥義抄に。田にたざろかし。立と依人形ありと云ふ。山
を縣居翁に地名あるべしと云まし。曾富騰を其処に
鎮坐神の名と見られし。依るに。然れど此の語にさま
ましく思ふ。はしを聞え。或も尋常の神名あらむ。坐山
田。曾富騰神。あざり。あそ有べし。れま。或説に。後哥よ
ある。山田のそをた。と云物あり。此に。足雖不行とあり
に依て。此神名を取て。擬へて名けたる物あり。を云依も
し。古今集に。足引に山田の曾富豆。己は子。我ををし。を云
うれば。し死こと。後撰集に。明暮し守依と。此みまからせ
ち。袂そをた。此身とぞ成。然依。拾遺集。長歌に。小山田を

人ニ任せて我ヲ只ニ袂ヲ不レ扱ス不レ身ヲ形シテ云々。曾根好
忠集ニ山田守ルそ不レ扱スも今ニ不レ扱スの久シにテ舟屋形ト云フ不
ち死見也久シ也。凡トと久シ也。続古今集。僧都玄實山田守
そ不扱の身こそ哀れ秋
て終ま不問人も凡し此哥トもトりテ曾富豆ト僧都ト名
以テ各ケし物と心得ル也古を考へゴ依レ非説あり名
義ト或人雨露ト所沾そ不レ扱スて立る由云フと云也。漆水
おど云説ト云フ今按曾富豆ト云ハ後ニおセふテ本ニ
おも足ラらズ也。今按。曾富豆と云は。後れおせふて。本を
曾富騰ヲも不扱スそ不レ扱ス人トて不意ス也。遲毘登を約れバ
ほちと云意ハ武烈天皇カゲヒメガ卷影媛歌ト難岐曾ホダ遅ト見也
後哥も多し山田を山此田を云也遠飛鳥宮段輕太子御歌ト
も多し山田を山此田を云也遠飛鳥宮段輕太子御歌ト
夜麻陀ヤマダ遠豆久理ト見也。今云山田を門田ヲ對テ思ふ
よ山下まよ山間おど總多人離

れとる地も作る田を云べシ然モバ鳥獸ノ殊ト多ク扱ル
く故も曾富騰を不扱スく立おけを山田此トハ云來也し
むらちテ久延毘古て不名モ世ト共レ雨露よう多ク風
お吹破ラま不扱スし多身體の壞を傷まスと依意ス也有
む久豆禮を久延ト言ハ古言也也。今云此師説よ依て思
る式よ能登因能登郡ある久氏比古神社此久氏久都
礼の約ままる言あらむも知法のら此都礼は氏と切ま
はち万葉十四ノ伊波久ノ敵乃ハほと三ノ河岸之妹我可悔也
河岸の崩と云仁徳天皇紀歌小以播區娜輸岩崩に
ウけとるれり仁徳天皇紀歌小以播區娜輸岩崩におぢ
何也。○此神者云く師云凡て古也禽獸を更も云は也
さらぬ雜物までも靈し何まバ皆神と云し例も云は也
此曾富騰をも神ト云フ也と異ハはキよ非也。此神とあ
るよ就て

山田のたどろろしおを非じと疑ふ人も有ぬはまど
所謂と云言おどを置るよても尋常神からぬ事明けし
○足雖不行^{アハカナルカネトモ}は作りて立と依ま^{イック}くおて何處^{イック}牙も動^クく
ぬを云お^{コト}て○盡知^{コトニシル}天下之事^{アノコトノコト}天下は万葉十八^{マンヤクハチジウ}ふ阿米能
之多^{オホク}と何^{ナニ}め如此^{カク}訓^クべし師云能^{シロクニ}を我^ガと云^クるも^モち^チて此^{コノ}稱^ナ
は天照大御神の所知^{シロシメ}看^ミびある高天原^{タカマノハラ}小對^{コタガヒ}へる此^{コノ}因^ユ土^{ツチ}
を謂^{イハ}へる稱^ナお^トて式^{シキ}此^{コノ}祝詞^{イハヒコト}を始^{ハジ}免^メ數^{カズ}見^ミえ^スとる古言^{コトコト}お^トて
師^シを古事記^{コトコト}に神倭伊波礼毘古^{カミヤマト}天皇^{ミコ}の御語^{ミコトコト}よ^リ天下^{タノカミ}と詔^{ミコトコト}
牙^{コト}る處^{トコロ}お^トて此^{コノ}語^{コト}を釈^{トク}て思^{オモ}ふよ^リ本^ホ漢籍^{カンシヤク}より出^デる^{コト}稱^ナりて
神代^{カミヨ}と^トて古言^{コトコト}よ^リをあら^ラじ^ク然^{シカ}ま^シど甚^シく古^コより^リ昔^{ムカシ}く
云^クお^トぬ^ル言^ハお^トてハ有^アり^ク此^{コノ}天皇^{ミコ}此^{コノ}御代^{ミコト}か^ドよ^リ未^ミ
此^{コノ}稱^ナあ^ハる^{コト}べ^シう^ラざ^シま^シど^モ漢^{カン}因^{イン}と^リ書^{シヤク}籍^{シヤク}渡^{ワタ}り^テ參^マ來^キて^シ言^ハ初^{ハジ}
と^ル稱^ナあ^ハる^{コト}べ^シう^ラざ^シま^シど^モ漢^{カン}因^{イン}と^リ書^{シヤク}籍^{シヤク}渡^{ワタ}り^テ參^マ來^キて^シ言^ハ初^{ハジ}
言^ハれ^ル稱^ナあ^ハる^{コト}べ^シう^ラざ^シま^シど^モ漢^{カン}因^{イン}と^リ書^{シヤク}籍^{シヤク}渡^{ワタ}り^テ參^マ來^キて^シ言^ハ初^{ハジ}
依^ヨま^シじ^クわ^カら^ズ也^{ナリ}田^ノち^チて^テ文^ノ意^ヲを^シ此^{コノ}神^{カミ}足^{タラシ}ハ^ハ行^クウ^ラ祢^ニむ^{コト}世^ノ間^ノ

此事を知らじやハ思^{オモ}ひ^ヒも^モ天下^{タノカミ}此事^{コノコト}は洩^ヒさ^シば^シ盡^{ツク}お^ト知^ル
ま^シ依^ヨ神^{カミ}ぞ^シ云^フ依^ヨお^トて^シ如^{カク}傳^ハふ^{コト}此^{コノ}文^ノ下^ノよ^リ言^ハま^シは^シ此^{コノ}
嘗^{コト}お^ト強^クて^シ功^{コト}績^ニあ^ルま^シ於^ケ書^キ紀^ノの^ノ傳^ハを^シ考^ヘる^{コト}お^ト大^キ己^ミ貴^キ神^{カミ}己^ミ命^ノ
此^{コノ}大^キ己^ミの^ノ功^{コト}績^ニあ^ルま^シ於^ケ書^キ紀^ノの^ノ傳^ハを^シ考^ヘる^{コト}お^ト大^キ己^ミ貴^キ神^{カミ}己^ミ命^ノ
命^ノ一^{ヒト}柱^ノの^ノ力^{チカラ}よ^リて^シ功^{コト}績^ニあ^ルま^シ於^ケ書^キ紀^ノの^ノ傳^ハを^シ考^ヘる^{コト}お^ト大^キ己^ミ貴^キ神^{カミ}己^ミ命^ノ
騰^トた^シ多^ク人^ノ此^{コノ}形^{カタ}あ^ハる^{コト}と^シて^シ難^{カシ}う^ラめ^シ然^{シカ}ま^シど^モ漢^{カン}因^{イン}と^リ書^{シヤク}籍^{シヤク}渡^{ワタ}り^テ參^マ來^キて^シ言^ハ初^{ハジ}
え^セば^シ足^{タラシ}も^モえ^セば^シ歩^ム行^クは^シ其^ノ状^{カタ}は^シと^シて^シ難^{カシ}う^ラめ^シ然^{シカ}ま^シど^モ漢^{カン}因^{イン}と^リ書^{シヤク}籍^{シヤク}渡^{ワタ}り^テ參^マ來^キて^シ言^ハ初^{ハジ}
此^{コノ}極^{トク}あり^ク然^{シカ}る^{コト}を^シ此^{コノ}物^{モノ}し^テも^モ天^ノ下^ノの^ノ事^{コト}を^シ考^ヘる^{コト}お^ト大^キ己^ミ貴^キ神^{カミ}己^ミ命^ノ
古^{コノ}那^ノ神^{カミ}を^シ顯^ハ白^クせ^シる^{コト}よ^リて^シ其^ノ神^{カミ}と^シ相^アひ^合は^シて^シ難^{カシ}う^ラめ^シ然^{シカ}ま^シど^モ漢^{カン}因^{イン}と^リ書^{シヤク}籍^{シヤク}渡^{ワタ}り^テ參^マ來^キて^シ言^ハ初^{ハジ}
予^カり^ク然^{シカ}る^{コト}を^シ此^{コノ}物^{モノ}し^テも^モ天^ノ下^ノの^ノ事^{コト}を^シ考^ヘる^{コト}お^ト大^キ己^ミ貴^キ神^{カミ}己^ミ命^ノ
見^ミ苦^クし^ク微^ホ賤^チき^ク者^ノと^シて^シ難^{カシ}う^ラめ^シ然^{シカ}ま^シど^モ漢^{カン}因^{イン}と^リ書^{シヤク}籍^{シヤク}渡^{ワタ}り^テ參^マ來^キて^シ言^ハ初^{ハジ}
意^イは^シも^モと^シて^シ難^{カシ}う^ラめ^シ然^{シカ}ま^シど^モ漢^{カン}因^{イン}と^リ書^{シヤク}籍^{シヤク}渡^{ワタ}り^テ參^マ來^キて^シ言^ハ初^{ハジ}
反^オ對^シの^ノ意^イも^モ有^アる^{コト}と^シて^シ難^{カシ}う^ラめ^シ然^{シカ}ま^シど^モ漢^{カン}因^{イン}と^リ書^{シヤク}籍^{シヤク}渡^{ワタ}り^テ參^マ來^キて^シ言^ハ初^{ハジ}
不^レ然^{シカ}る^{コト}を^シ此^{コノ}神^{カミ}實^ニは^シも^モ鳥^{トリ}獸^ノを^シ驚^{オドロ}さ^シむ^{コト}料^カふ^{コト}假^カ初^{ハジ}此^{コノ}如^ク
作^スて^シ立^ツと^ル物^{モノ}お^トし^テ有^アる^{コト}ま^シた^シ家^ノは^シ靈^{レイ}此^{コノ}有^アる^{コト}は^シく^モ非^ズざ^シ依^ヨる^{コト}

但し中昔の書等亦も見え、今、世亦も何と云ふ人此作を
る像、まと画きとる物、おどよも甚異、うる靈、何事も多
か、依よ、合せて思、存、曾富騰、を云へ、神代の神、此造
まる、おまむ、靈有、らむ、こを、然も有、ぼし、とを思、ひ、あ、ぐら
天下、此事を盡く、お知、と云、ことの、餘、お、あ、る、の、依、依、お
就、て、熟考、する、よ、深き、由、縁、あ、り、げ、よ、所、思、也、其、は、ま、於、此、り。
足、雖、不、行、と云、る、お、上、文、よ、召、久、延、毘、古、而、問、之、時、云、く、と
有、ま、む、言、語、ハ、更、お、り、召、お、應、て、歩、み、參、出、と、り、と、も、聞、也。
然、れ、ば、此、神、は、し、も、體、子、固、有、此、靈、魂、を、無、れ、ど、他、を、問、
依、く、事、お、從、ひ、て、神、ま、と、人、或、を、物、お、ま、ま、何、お、は、れ、其、事
を、知、れ、る、靈、此、憑、託、て、誨、ふる、故、よ、天下、此事の、悉、く、知、ら
依、く、よ、て、案、は、曾、富、騰、の、本、を、お、知、れ、る、お、は、有、は、む、じ、く、所

念、と、り、其、を、古、く、め、今、も、巫、祝、お、ぎ、の、憑、人、と云、を、立、て、神
ま、あ、人、此、靈、を、祈、り、憑、せ、て、物、問、ふ、こ、を、此、有、も、云、ひ、以、ち
行、ら、む、同、じ、意、バ、牙、よ、れ、む、有、ら、依、神の道をよく辨へて、
眞此物知人とあらむ
人、ハ、と、く、擬、と、ら、む、お、ま、久、延、毘、古、神、を、行、う、せ、言、は、ら、む、
語、依、む、う、りの、驗、を、有、ま、じ、き、事、お、も、非、在、の、し、
神、の、天、下、此、事、を、盡、く、知、て、在、る、由、を、辨、了、て、此、を、顯、白、せ
り、し、谷、具、久、も、は、と、い、み、じ、死、神、お、あ、む、有、ら、依、師、言、の、如
く、此、久、延、毘、古、此、故、事、を、讀、も、吾、が、古、傳、の、漢、籍、此、さ、く
お、り、と、る、と、は、遙、お、異、よ、て、直、く、安、ら、か、れ、り、し、事、知、ま、て、
い、を、貴、し、書紀よ、此、類、の、故、事、を、捨、て、省、か、ま、
し、ハ、漢、意、お、遠、き、グ、も、あ、る、べ、し、大、三、輪、神、鎮
座、記、お、別、宮、小、社、之、事、と云、處、お、曾、富、止、神、社、久、延、彦、命、立、

奉齋年号未考を何に。今も有はれば。天下此事知と成はる。志
く思をむ入を。必常小齋祭るは。ま神ふあそ。世の神主と
更にも云は。凡て神靈を乞祈奉らむ入を。此神此由縁
を知ら。密を有べうら。然まむ漢風み成果とらむ者は
左まき右粗畧神此御国の人多らむ者。を
也。然粗畧思ふべきふを非はるし。

故自爾大名牟遲與小名牟遲

二柱神相竝而一心戮力。因巡

作堅出時伊邪那岐神出麻奈

子坐熊野加武呂命加夫呂岐

櫛御氣五百津鉏神鉏所取二

野命而於二柱神事依賜矣。於是殖

生葦薦菅而如水母浮漂出因

地固造矣。因曰葦原因爾時稻

種出墮處於今云多彌也。

故自爾^{カレヨリソレ}。神產巢日^{カミノウラヒ}御祖命^{ミソトノミコト}の御命^{ミコト}。兄弟^{ケイテイ}と爲^{ナリ}て其^{ソノ}國^{クニ}を
作^{ツクリ}堅^{カタ}くと。詔^{ミコトノコト}ひ遣^{オク}せ賜^{タマフ}へるを承^{ウケ}て云^{イハ}す。○相^{アヒト}竝^{トシ}をば。相^{アヒト}共^{トシ}
を云^{イハ}ぐ如^{カドシ}く。互^{オカミ}ふ勝^{マカリ}劣^{オトリ}を物^{モノ}し給^{タマフ}ふ依^ヨ状^{カタ}あり。○一^{ヒト}心^{ココロ}戮^{ムス}
力^{チカラ}は。本^ホは戮^{ムス}力^{チカラ}一^{ヒト}心^{ココロ}と有^アて。一^{ヒト}心^{ココロ}を。義^{ヨシ}を得^エて。心^{ココロ}衰^{ウツ}一^{ヒト}備^ビ力^{チカラ}
乎^ヤ戮^{ムス}世^セと訓^{ツケ}るし。○國^{クニ}巡^{メグル}作^{ツクリ}堅^{カタ}之^ノ。大^{オホ}名^ナ牟^ム遲^チ神^{カミ}。前^{マエ}ふ須^ス佐^サ
之^ノ男^ヲ。大^{オホ}神^{カミ}の御^ミ靈^{リョウ}を賜^{タマフ}りて。國^{クニ}作^{ツクリ}ふ功^{イシメ}み給^{タマフ}ふこと。は。其^{ソノ}本^ホ
業^{ミヤゴト}あるふ。今^{イマ}はと産^{ウマ}靈^{リョウ}。大^{オホ}神^{カミ}の御^ミ命^{メノト}として。少^{オホ}毘^ヒ古^コ那^ナ神^{カミ}を
副^{ソノヘ}給^{タマフ}ふれば。益^{トク}くふ力^{チカラ}を得^エて。相^{アヒト}共^{トシ}ふ國^{クニ}巡^{メグル}作^{ツクリ}堅^{カタ}給^{タマフ}ふれ

也^{ナリ}。万^{マン}葉^{エフ}七^{シチ}ふ。大^{オホ}穴^{アナ}道^{ミチ}少^{オホ}御^ミ神^{カミ}比^ヒ作^{ツクラ}せる。妹^{イモ}勢^セ能^ネ山^{ヤマ}を見^ミらく
し吉^{ヨシ}も。六^ムり。大^{オホ}汝^ニ小^{オホ}彦^{ヒコ}名^ナ能^ネ神^{カミ}こそは。名^ナ著^{ツケ}始^メ々^々米^メ。名^ナ耳^{ミミ}を。
名^ナ兒^コ山^{ヤマ}と負^{オシ}て云^{イハ}く。十八^{ハチジウ}ふ。於^オ保^ホ奈^ナ牟^ム知^チ。須^ス久^ク奈^ナ比^ヒ古^コ奈^ナ野^ノ。
神^{カミ}代^ヨ欲^{ヨリ}里^リ伊^イ比^ヒ都^ツ藝^ギ家^ケ良^ラ志^シ云^{イハ}く。か^カく趣^{オモ}ふ云^{イハ}傳^ヒ予^コあるも。
皆^イ天^{アメ}下^ノを作^{ツクリ}巡^{メグル}作^{ツクリ}堅^{カタ}給^{タマフ}ふ功^{イシメ}み依^ヨてある也^{ナリ}。○伊^イ邪^サ那^ナ岐^キ神^{カミ}と云^{イハ}す也^{ナリ}。事^{コト}依^ヨ賜^{タマフ}矣^{ナリ}と云^{イハ}すまでは。出^デ雲^{クモ}風^{カゼ}土^{ツチ}
記^キふ採^{ツク}れるあを。既^イふ徴^{シズメ}ふ云^{イハ}依^ヨぐあをし。○麻^マ奈^ナ子^コ坐^{マス}熊^{クマ}
野^ノ加^カ武^ブ呂^ロ命^{メノト}は。下^{シタ}ふ引^{ヒキ}く。出^デ雲^{クモ}國^{クニ}造^{ツクリ}神^{カミ}賀^カ詞^ジよも。伊^イ須^ス佐^サ之^ノ
男^ヲ。大^{オホ}神^{カミ}の。出^デ雲^{クモ}國^{クニ}熊^{クマ}野^ノ社^ヤに留^{トド}り給^{タマフ}ふ御^ミ靈^{リョウ}を申^{マウ}せ也^{ナリ}。麻^マ奈^ナ
子^コ。縣^{ケン}居^イ翁^ウ說^{セツ}ふ。万^{マン}葉^{エフ}。父^{チチ}母^{ハハ}爾^ニ吾^ガ者^{モノ}眞^{マコト}名^ナ子^コ曾^{ソノ}也^{ナリ}云^{イハ}ふを。

愛子とも書と依ぐ。此此言と同じ死を思ふば、眞名子也。
愛みの殊ある義ふて、眞之子を親み愛しむ詞あり。と言
ま死。方葉六よ、父公尔、吾者眞名子叙、妣、刀自尔、吾者愛兒
紋云く、十三、長哥よ、母父尔、眞名子尔可有、六、云く、あ
ど見也。熊野を風土記ふ。意宇郡熊野山云く、熊野大神之社
坐と見え、上よ出と依。熊成峯と同お依あ。と彼處ふ傳
せ依ぐ如し。第七十九段の傳見べし。ちて此社は神名式よ、意宇郡よ
熊野坐神社大神とあり。風土記よ、熊野大社と擧て。在神
祇官と云ふる是あり。因史ふ。仁壽元年九月庚午朔、擢出
雲、因熊野杵築兩大神、竝加從三位。貞觀元年正月廿七日、
出雲、因從三位熊野神正三位、同年五月廿八日、授出雲、因

正三位勲七等熊野神、從二位。同九年四月八日、出雲、因從
二位勲七等熊野神、正二位。おど見えと也。かくて此社の
須佐之男、大神お坐こむ。因造神賀詞よ。出雲、因乃青垣
山、内爾、下津石根爾宮柱太敷立氏、高天原よ千木高知坐
須。伊射那伎乃日眞名子。加夫呂伎熊野、大神櫛御氣野、命
とあり。師云。伊邪那岐、命の御子は多々る中よも、天照大
御神也。須佐之男、命ハ、殊よ御愛子お坐こと。上よ見えと
也。日は日子日女、此日お同心。加夫呂伎を神祖あり。大名
持、命の御祖あり故よ。出雲、因ふては、殊よ如此申せ依あ
也。櫛御氣野、命と申は、須佐之男、命也。熊野宮よ鎮座也

御靈を稱奉れる御名あり。其例を同神賀詞に大名持命
多む別は大物主櫛懸王命と稱する類も有り。同神も其社
社の今此説ハ上宮三社中伊邪那岐命伊邪那美命
左早玉男右事解男あり。下宮ハ天照大神須佐之男命
りと云ふまども神名式よ多む熊野坐神社とのみ有りて
幾座や云こぞ無まむ官帳小入て式よ載まると主むし
て祭る須佐之男命一座のみあり。其餘をみふ添て祭る
神よて官帳よハ入ざ依神ハ総て神名帳此例何ま此
神社よても幾座といふこと。式小熊野を同郡よ久志美
あきむみあ一座を知べし。氣濃神社と云も別あ依は熊野大神をまよ別小祠を
依社あるは。此御名を別よ一神と心得むハ非あり。さ
神宮と云依は例の妄説あり。まよ祝詞考よ熊野神社を
穗日命の御子健三熊命と為らましむ熊と云名小依て
此説あまど誤あり。さてハ終事多し。伊射那伎乃日
眞名子ぞ云ひ。まよ彼神賀詞のみあらび。文德實錄三代

實録おどろも熊野ハ先杵築を後ふあげまよ勲位も一
等降り。あまら彼健三熊命よて叶ふはきうも須佐之
男命よ坐こと疑。せ有り。斯て櫛御氣野と申は御名の解
を缺れとる。櫛御氣は奇御木野を主あ依べし。木を氣
由上第十四段一木けて奇御木とは楠杉檜木あぞを
とある処よ注せり。けて奇御木とは楠杉檜木あぞを
生して。外圍を服子給ふはき設の浮寶まよ瑞宮の材と
爲給へる功德多。稱奉れる御名あるは。風上記島根郡
尤熊野大神命。○五百津鉏神鉏云く。五百津を數多死を
と申せ。云言ある由。既よ云子。神鉏とは齋鉏と云如く。齋ひ
稱子多依名。徒り尊みて稱子依ふも有べし。所取くと
は櫛御氣野命此御親あると此鉏を取く。賜ふ状あ

也。此第七十六段見ある如く、国事依賜矣。天地初
發此時、天神とち此御命以て、伊邪那岐、伊邪那美二柱
神、天瓊戈を賜ひて、是漂子、依國を修、固免成せと、言依
し給子、る處よ注せ、依如く、事を依任せて、執行をしむる
義、卜て、事此趣も彼處と全同じ。抑、須佐之男、大神、その宗、
よ入坐れど、本より此、國土を御父、伊邪那岐、大神、此御依
し坐る、御命を畏み、作堅め給は、では、有まじき、謂、此、あ
ゆ、故よ、今、根、國よ入給ふ、際、ま、でも、御子、神等、を見、立、て、國
作らしめ給へる、う、永く、彼、國の、大神と為、給ひ、お、く、も、猶
この、國よ留給、子、依、御、靈、神、此、かく、大名、年、遅、小、名、年、遅、神
よ力を加へて、此器を賜ひ、國作の事を依給へる、を、稱、美
奉る、誇、き、辞、も、絶、て、いと、も、等、
く辱、れ、大、御、心、う、ぞ、有、る、依、
ちて、本書、風土記、よ、意、宇、郡
出雲、神、戸、郡、家、南、西、二、里、二、十、步、伊、弉、奈、枳、乃、麻、奈、子、坐、熊

野加武呂乃命、五百津鉏、神鉏所取、而與所造、天下大穴
持命、二所大神、此大神等、依奉、故云、神、戸、他郡等、神、戸、且、如
之、と、何、也。同記抄よ、出雲、神、戸、相、當、大、草、郷、中、神、明、之、社、辺、
神、戸、且、如、之、と、也、天平、以後、合、從、神、戸、大、辰、之、社、と、何、也、他、郡、等、
二所、大神、よ、奉、る、よ、を、皆、同、じ、と、あり、
文、意、を、熊、野、加、武
呂、乃、命、ハ、天、下、造、ち、大、神、よ、五、百、津、鉏、の、神、鉏、を、依、し、與
子、依、御、功、あ、也、大、穴、持、神、を、其、を、執、て、天、下、を、造、ち、御、功
あ、ゆ、よ、依、て、此、所、の、神、戸、は、此、二、所、大、神、等、よ、依、奉、ら、れ、也、
と、云、意、と、通、え、と、也。あ、ち、此、文、の、こ、と、を、徴、よ、ち、て、上、よ、師、
此、引、れ、し、熊、野、大、社、と、同、郡、あ、ゆ、久、志、美、氣、濃、神、社、を、神、名
式、よ、山、狹、神、社、の、下、よ、同、社、坐、久、志、美、氣、濃、神、社、と、あ、ま、バ、

山狹神社内に齋はれ給へるなり。山狹神社に風土記にあり。夜麻佐社とて二社あり。抄に山佐村に属す能義郡に而熊野村東南也と云へり。度會延經考證に此社の下に初に天地本紀に伊謝那支命娶惠乃女命生大夜乃女命次足夜乃女命次若夜女命三神大夜乃女命熊野大御神后坐陸上立左肩忍奈豆流時成出來神名加古川比古命又右肩忍奈豆流時成出來神名熊野大御神加夫里支名久志彌居怒命自髻中成出來神名須佐乃乎命三柱云々熊野村宮柱太知奉云々后大夜女命山狹村宮柱太知奉而靜坐と有字引多也此書を今傳をらび延經も長寬勸文に見とるを引多也再引とるあり全文を第廿六段の徵に引多りき此を引る處あり也此をいふく誤也紛とる傳と聞えて

解難トキ々カクまと山狹村宮此事ハ縁有げふまを吾も引お也但予が見とる本を山字を小と作とめそれ正はと神名式くは此に由あり後人々と考考て定むべしはと神名式ふ紀伊弜牟婁郡小熊野速玉神社大熊野坐神社大名神也兩社並びて在也此の兩社此こと因史に貞觀元年正月並從五位上同年五月廿八日從五位上熊野早玉神熊野坐神坐神從二位とあり扶桑略記に延喜七年十月二日授紀伊因正二位熊野早玉神從一位又從二位熊野坐神正二位を有る也中に小おおちり也此を共ふ出雲因意宇郡亦依を移祭れ依社あるまを論ひあし其は彼處も熊野坐神社速玉神社同郡にあり風土記にも速玉社と舉とるを抄し大草郷中熊野村熊野社同地と云ゆ紀伊因の也此を移せる故ふ熊野速玉神社と

は云、依れ也。然る例いと多加め。但し移せる時代を今知
はらば、此、因よは、早
く五十猛神並よ其妹神二柱も鎮座せバ、其御親ある故
ふ。熊野坐大神を移し、まよ其社よ縁ある。速玉社をも移
せる。因て、木、因、造の祖。若くは熊野をもと、因をも云し
のむ。熊野、因、造、此祖あどの移せる。あ依べし。何よ必移せ
依世はいと上。南紀名勝志よ。熊野村新宮庄。上熊野村。
中熊野村。下熊野村あ也。今新宮村と云も。元を熊野村の
内ふれども。新宮大神鎮座故。所名せせる。諸書ふ
熊野村と云依を此處あ依る。總て年婁一郡を熊野と
云也。新宮熊野村ふ因て云と見也。と何也。地名を熊野を
云も。熊野大神を移せる故。神の本居此地名の移まる
あ也。此、例も、今數ふるよ
暇あらば多の也。 して新宮とを。速玉神社を申也。

此を速玉之男神と申して、伊邪那岐大神、豫母都因ふ往
坐し。伊邪那美大神の彼處よ坐し。醜灸き穢き御有状を
御覽して、族離れむと詔ひ。唾給ふ時よ坐する神ふて。此
神と。豫母都事解也。男神とを。御夫婦の御親此絶る方よ
就て坐すあ也。第十九段の
傳見るべし。 然るふ出雲は更あ也。此
も熊野大神よ屬て祭らま給ふ事ハ。須佐也。男神を。伊邪
那岐大神の御體ふ受知看せ依。伊邪那美大神の御親み
此。清く放あ。驗よ因て。坐する神あまむ。此事ハ第二十
九段此傳よ季
く注。御心と。御母此坐し根。因。坐。思欲して。其御
情のほくよ。此御世の神功己よ畢て。罷り給ふ。其事解也。

宮ある故に添て祭らま給ふよぞ有べき。其縁を探して
男、神も必共祭られ給ふべきもあきハ何ある由
丸らむ或書ハ此、神も相殿坐とし云了れど式よ二
座と無まバ、推量此、後世ふ此、兩社のおと種く此説あま
説ふらむも知まば、
ど、總て論ふよも足らぬ説ども丸也。長寛勸文二條天
とちふ勅命せて、勅しめられとる文を、集とる書あるよ
本、因よ叶了る勅、と、ごよ形き、只、太政大臣殿の御説
此、みぞ大の宗よ叶了る説ある、江談抄よ熊野三所本
縁、事此問答の処よ熊野三所、伊勢大神宮御身云、本宮
并、新宮大神宮也、那智荒祭、又大神宮、救世觀音、御変身、云
云、此、事民部卿俊明、所被談也、云く、と、ある答を以ても、其
世の人、熊野坐、神祇の本縁を、知ざる事、を察べし、熊野三所
と、た、熊野坐、神社を、本宮と云ひ、速玉神社を、新宮と云ひ、
那智山、權現宮と云ま、加へて、三所と云あり、然れど、那
智は、式よ載らま、び、ま、と、本宮、新宮よ、は、祢宜祝あ、て、結、那
智、ふ、を、僧、此、み、在、と、ぞ、其、祭、神、を、本、社、事、解、男、神、よ、て、結、宮
と、云、と、云、へ、り、又、本、宮、新、宮、の、神、等、を、も、配、祭、り、ま、と、十、二

所宮と云ふも有り、とぞ、凡ては、と在田郡よ、須佐神社。名
ハ佛法風、れる故よ、信、ぐ、と、し、
大月次、新嘗、何、正、鄰、郡、あ、ま、ぞ、も、熊、野、坐、神、社、と、並、と、依、を、由、何
依事ある、清和天皇紀、貞觀元年正月廿七日、從五
帳よ、た、從、一、位、須佐大神、と、あり、和名抄よ、當郡よ、須佐郷
も、見、也、考、證、よ、在、保、田、庄、子、田、村、南、中、山、半、腹、と、云、へ、り、
近江、因、高、嶋、郡、ふ、熊、野、神、社、越、中、因、婦、負、郡、ふ、熊、野、神、社、丹
波、因、熊、野、郡、熊、野、神、社、清和天皇紀、貞觀十二年九月廿
五位下、と見也、丹後、田辺府志と云物よ、斎、大明神と云、
市場村の中よ、神、ふ、事、る、家、あり、女子を、生、る、時、神、箭、飛、來、
りて、彼、家、此、棟、了、多、て、正、四、五、歳、の、と、き、宮、よ、送、り、奉、る、山、
中、よ、在、れ、ど、も、獸、も、傷、る、こ、と、あ、し、成、長、り、て、交、接、の、心、生、
云、あ、此、斎、女、あ、る、宮、也、あ、ま、世、人、斎、明、神、と、云、あ、り、と、云、り、
あ、と、有、正、此、等、も、熊野坐神社、字、移、せ、依、社、丸、る、異、神、あ、

あう知られど必。因ふ記し出於。此、外諸国よ、式ふも列ら
まど、熊野と称ふ大社の多うる。○於是と云々。曰、葦原
は御徳の優れとる故あはれを。○初、伊弉諾伊弉冉二神
因と云まて。大三輪神鎮座記ふ。初、伊弉諾伊弉冉二神
共生大八洲国及處、小嶋而地稚如水母浮漂之時。大己
貴命與少彥名命、戮力一心殖生薦葦。固造国地故號曰、固
造大己貴命。因以稱曰、葦原国とあるを採れると。徴よ
云、あが如し。舊事紀よも、同趣の文意ハ、天地初發此時、
伊邪那岐伊邪那美二神して、大八嶋国を始、嶋くをも
生置給へまど。地稚く水母あは浮漂ひて在しうば。大名
牟遲少毘古那二神、御心を戮せて、葦薦菅れどを殖生し

あう。固造り給ふ。其葦れ生茂。故よ。葦原国と云々
れ。右よ引く文よ菅を無れど、あハ下。葦れあは。初、
出て。其處、注す。薦ハ和名抄ふ。本草云、菰。亦、一作、蔣。
和名古毛とある物と同水草よ。万葉を始、多く古毛
よは。此字を書とめ。字鏡よ、蔣蘭あど。菅も和名抄ふ。唐
韻云、菅。或、作、蔣。草名也。和名須介とあり。字鏡よ、蔦葉あ、
て仁明天皇紀、此長歌よ。日本乃野馬臺能、固遠賀美侶伎
能、宿那毘古那加、葦菅遠殖生し津く。固、固米造介牟與理
云く、詠。此の哥、師も因号考、葦原中、固の処よ引て。
此詠る、必、それ、み據あり、む、云れしは、上、此等、れ
よ引、多、大三輪神社記を、師、見らまざる、故あり。

備前、固ある門人、小谷長秋が許をり、其縁ある人の地よ
井を掘、乃ゆよ一丈ばり下よ、葦の牙ぐみたるが出
し、也、植とるふ、芽をふきて栄えと、三百年たか、前
を、海辺お、正しを、今を、二里許も遠そ、地、ぬ、ま、下、總、固、香
取、郡、鎬、木、村、お、ゆ、門、人、平、山、光、春、が、語、る、を、我、が、辺、を、も
少、う、高、き、処、お、ま、ど、此、よ、東、方、凡、そ、徑、二、里、は、お、正、は、い
と、低、く、平、う、お、る、所、お、て、海、上、西、瑳、香、取、の、三、郡、は、係、ま、る
が、其、を、今、椿、新、田、と、云、ひ、ま、と、俗、に、干、写、と、も、云、此、を、も、と
湖、よ、て、有、な、ゆ、が、何、せ、て、沼、と、あり、蓮、お、ど、必、生、と、り、し、を、
去、し、開、文、七、未、年、近、辺、の、者、等、此、願、ひ、は、依、て、同、九、年、十、月
と、云、開、発、普、請、は、じ、ま、同、十、一、亥、年、功、畢、て、新、田、と、成、ま、
り、と、云、ふ、其、何、多、り、何、処、と、お、く、葦、薦、菅、お、ど、の、根、を、活、と
る、が、如、き、も、此、多、く、出、ま、と、蓮、葉、を、り、何、処、も、芽、を、出、は、も
有、り、斯、て、地、下、四、五、尺、も、掘、ま、バ、何、処、も、蛎、が、ら、蛤、が、ら
れ、ど、夥、しく、出、る、を、見、ま、む、往、古、は、海、お、正、し、お、と、疑、お、し、
今、を、海、濱、ま、で、二、三、里、も、隔、と、ま、り、寛、文、年、中、と、り、今、百、五
十、年、餘、お、る、と、云、正、か、ゆ、事、と、も、を、思、ふ、お、ま、お、け、て
も、甚、奇、れ、依、物、お、り、な、ゆ、ち、て、上、よ、云、此、草、ど、も、此、根、よ、
多、く、錢、氣、を、持、と、ぬ、と、云、を、疑、ふ、人、も、有、お、む、此、根、を、
不、第、百、三、十、一、段、天、磐、笛、の、下、お、注、せ、ゆ、考、ま、見、て、辨、べ、し、

然まむ二柱神也。固造正固米給ふよ。此三品の草を、固此
端ふ殖生し給牙ゆ事也。深き由ゆ神態ふて、今現よも。
右よ言ふ如く。此草ども此自然よ生出て。固造る状お依
事也。此の謂ふ依る事ふて。人は自然の如く思牙ども。案
は幽と正。此二神也。御靈を幸牙給ふお頼る事おらむと
所念も依あり。固を知む人おどを、とく此理を辨へて。固
祕て。此二柱神を祭正。此三品の草を、まお生し立。ちて。此
て地を固然して。固造此功を成べき物よこそ。ちて。此
草ども。二神して殖生し給へ正。や。は有まど。專とを少毘
古那神の生し給ひ。上よ。一神お係て云。る。多も思ふべし。此
神決免て。宇麻志葦牙比古遲神お依べく思ふ由ゆ正。ち

依て此葦ちふ草はしも。天地初發の時ふ成出し。彼一物
ふはば生出し物ある由て。彼處よ既ふ云る如くあるが。
第二段葦牙の下第六段
葦船此下此傳見るべし。其葦牙此如く。萌騰れ依物よ因
て成坐る。宇麻志葦牙比古遲神を。彼處よ云如く。皇產靈
大神此產靈よ。因て成坐る神の始ふて。是より前よ天御
中主神高皇產靈
神皇產靈神の御名を出さむと此三神を始おく終れく。
天地未生さむし前より在坐る神等よて此神とちの產
靈よ因てぞ比古遲神よめ次く此神等此
生出ませるおと既よ始お委く注へりき。葦牙と御名よ
負坐依を思ふよも。甚少さばよ聞えて。只此譬語を思
えれぬ。元とて葦よ由ある神と察依くよ就て。深く思牙
ば。彼神をしも。皇產靈神の御靈よ依て。生坐る神の長あ

依る。前段ふ採れ依傳ふ。少毘古那神を。產巢日神此長子
ぞ有よ思ひ合さむ。葦よ因て生坐るが。少毘古那神の葦
残生して。因造堅久給する傳よ思ひ合はむ。少毘古那神
を。產巢日神の御手候とて。漏落とてと詔するを思牙む。
元是天神ある事れども思ひ合は依る。此を疑おく同
神と通えとて。但しかく言はれ。彼葦牙比古遲神の段よ。
獨神成坐而隱御身矣とあるを思ひ寄せ
て。彼神を天下に降坐させ神と聞ゆるを如何おと云も
有はるまど。彼處を多し成坐る因を語て傳とる耳よて。
事蹟の傳おく。後お御名の替りて事蹟の何る故お彼を
彼此を此と別り思牙る。古傳此お不らう。依所あり。例
を云はれ。彼比古遲神此次子成坐る。天上底立神も。獨神
成坐而隱御身とあるれど。姓氏録を始お他の書とめよ。依
て考れむ。亦名も數有り。其御末の氏と多くて。此神
も天降坐るよやと思はる。を合せ考ふべし。凡て古

事記書紀の傳、なれみ傳、と思ひ、文面よれみ依て、然るを
神世を思ふ人、己が今論ふりぎり非也、然るを
此神を彼一物よまば生出と依を葦舩るが其芽此萌出
る状ふ、萌騰まる物何也、其物よ因て成坐して、あの萌上
れる物也
即天日此御国と成まるこ始、於て天御国よ坐々むが、御
と、既よ委く云るを見べし、師もりおぐ、此由かくて元よ
祖命の御教養よ順は、御手候よ也漏墮て、此中、国よを
降坐び、外、国よ放往坐し、前よ海より依來坐るは、外、国
と也渡來坐る也也、師もりおぐ、此由かくて元よ
り、葦よ由あ依神よ坐せむ、神皇產靈御祖命此、其をしも
所思看坐して、大名牟遲神の、国造る功を祐し、タケ給する
よぞ有る依、阿那ふふと、阿那可畏、○水母也、和名抄よ、崔

禹錫食經云、海月一名水母、貌似月、在海中、故以名之、和名
久良介、とあるよ依て訓法し、師も云れと依如く、此物海
中を浮漂ひ行く物よ、其形書晴と依天、月此白く見
也依よ甚とと似て、信よ海月と名けおべき状ととる物
也也、其、レクニトコ地の浮漂ふ状を、彼物此如くと譬と依也、さ
此語古事記よ、天地初發の処よ、固雅、如、浮脂、而久羅下
那洲、多陀用幣、琉之時、とあり、去此詞、ともの義も、第二段
の傳よ注へるを見るべし、○鍊胤云、久羅下と云、（）浮漂
言、義也、古史本辞經よ委く説れと、り就て見べし、（）浮漂
ハ、ウキタ宇伎多陀用布、と訓むも、惡うら、ヒ祢と、神代紀の初よ、ウキ洲
壤、テウ浮漂、ハク警猶、ユカ游魚、ニヒ之水上也、と依、ウキ浮漂、ウキ字を古本よ、ウキ宇伎
多由多布と訓れむ、其訓を取、常の本よ、ウカレ万葉

二。大船之泊流登麻里能絶多日二云。はと夕星之彼
往此去大船之猶豫不定見者云。此者大船の水は浮び
て由く良くと動く状を云るおれば。古本は漂字を訓る
を能當まじ。多由多布多。用布もとハ決然て同語を依
てし。依勝益士とも詠るよて。詞意をく聞えたり。ちて
浮漂之固地を大地全の謂ふを非也。天地初発の処は
大地全を云るおまど。彼と伊邪那岐伊邪那美二神御
は異あり。思ひ混ふはうらび。合坐て。次く生給へる固は八十固。嶋の八十嶋を云す。即
抑おれ大地は始はしも。皇産靈大神とちれ御靈は依て。
かの其状言ひ難き一物成出とる。其質を泥と淖の混沌

のれとる物おはら。其中お含有すし牙ちふ物也。即萌騰
して天日と成とる後。其一物は伊邪那岐伊邪那美二
柱神成坐ゆ。彼天津神の御靈として。天瓊戈を言依し
給ひ。二柱神まが其御戈以て。青海原を搔成し給ひ。遂は
其を衝立て。固中は御柱と爲給すれ。泥は御戈お締り
憑て。淖を其外を包ゆる如く成ゆる時。大八嶋固を始
め。嶋くをも。次くは生給すれ。第九段までお注せるを
見て。其趣を辨べし。其を淖上お生給する故。漸くは大は成行
ども。元々お淖は浮て在れ。漂ひて壞ゆる事も有らむ
故。今かく葦管おを殖生し。造固給するれ。固彼

引の故事を更なり。彼処に注せる今、現るも、津田流田を
ど云が有るを、作正固免て田地とあり、状をも思ひ合せ、
大小き違ひ、こそあま、理を同じ趣あり、のし、ま、地震おど
して、固地の没て海とあり、或は海の陸地と替れる事、
どもを正しく有る事、又かしまを沈没斯て山を、其
みて、此は新島に出来し事も、あきま非、
鎮と成れる事と所念也。そは万葉三卷、山部、赤人が富士
山を詠歌ふ。日本の山跡、固に鎮とも座に、祇のも、寶を
も成まざる山のも、と詠るを、山を固に鎮てふ古説あり
しを、心よ含みて詠るよやと聞ゆまを、カレ因曰、葦原
固、お上りの如く、葦を植生し給ふ故よ。四方は海邊を、
悉くふ葦原を正しくば、如此も稱する由あり。カ尔末よ
葦原、中固とある處、イ注をむ。第百六段の○爾時と云と

正以下を。出雲風土記よ。飯石郡多禰郷、屬郡家所造天下
大神大穴持命、與須久奈比古命、イナダネオホキ巡行天下時、イナダネオホキ稻種墮此處
故曰種、ト神龜三年、トとあるを採ま。此郷名和各抄よも出
郷、イナダネオホキ縣谷村、中今曰郡、イナダネオホキ也、併縣谷多禰、イナダネオホキ松笠坂本乙、イナダネオホキ天上よ
多田加食田、掛谷宮内、吉田、以為一郷と云へ。天、イナダネオホキ上よ
正降墮とめと通也。抑此固に稻植るを、イナダネオホキ前よ須佐之
男、大神の、大須佐田、小須佐田を作給ふ、イナダネオホキ後ふも、大年神
あど次くふ。田作る業を教給ふれ。稻種をいと多有、イナダネオホキ法
きよ。今別よ降賜へ、イナダネオホキ後よ皇美麻命の天降坐、イナダネオホキ以時
ふ。天照大御神に、別よ齋庭に穗を賜へるを思ふ。此も
然る別ある種を降し給ふ、イナダネオホキ法し。赤縣ふも、イナダネオホキ神
農と云々

王此世も天より粟を降し
とりと云こと彼国籍も見
えあり粟とを粉をいふ
此も稻種をあるよ同じ

爾大名牟遲神遠延而伏出時

少毘古那神欲活出而以大分

速見湯自下樋持度來而漬浴

則有暫閒而活起居然詠曰真

暫寢哉而踐健出跡處於今存

湯中出石上伊豫国出温泉是

也仍憫人草出病二柱神相議

而始製藥湯泉術矣伊津神湯

又其數而箱根出元湯是也

此段爾と云く。温泉是也と云まては。伊豫国風土記を
採て記せゆ。既に徴ふ云子也。此古風土記ある
紀に引くるを。○遠延而伏之時。本は見悔恥而
採れぬあり。○遠延而伏之時。をかく書る由は
徴ふ云。書紀に瘁ま。瘵臥あぞ。毒氣も中て病
を見べし。委く。神武天皇卷に伏を許夜須と訓む由。上
云。注せる師説を見べし。伏を許夜須と訓む由。上
云。第十一段の国造堅米むと。山川幽谷をも嫌ふこと
なく。巡給ひむ故。荒振神邪物あど吐れむ氣吹ふ。
毒され給へるふる。神武天皇卷。天皇熊野村に廻
幸せゆ。大熊出て毒氣を吐て失とゆ。天皇倏忽に遠
延はし。御軍も皆遠延て伏せる事見え。景行天皇卷。信

濃坂を度る者多く神氣も中て瘵臥せること。ま彼
此に惡神の毒氣を放て。路人を苦しとゆ事。ほと仁徳天
皇卷。被毒蛇而多死。あど有を思ひ合ふ。倭建命
伎山神も惑さ。賜ひしも同類の事。○大分速見。景行
あり。れ不其所。よ注ふを見るべし。○大分速見。景行
天皇紀十二年。此處。天皇幸筑紫。十月到碩田。其地形
廣大亦麗。因名碩田也。碩田。此云。於保岐陀。到速見。邑有女人曰。速津
媛。爲一處。長其間。天皇車駕而自奉迎。とあり。碩田を
固と云ひ。速見を邑と云ふを思ふ。當昔ハ。速見に碩田
国内ありしと通也。後よ。豊後固の郡とありて。彼固の
風土記。大分郡速見郡と出とめ。和名抄も同じ。れ不此
二郡の事。景行天皇

卷ノ季ク けて湯之風土記。速見郡赤湯泉在郡西北此湯泉

火穴在郡西北竈門山其周十五許丈湯色赤而有塗用足

塗屋柱塗流出外變爲清水指東下流因曰赤湯泉と云。

是ふるばし。此風土記の箋釈と云物ノ湯今属石垣莊野田邑其潤十餘丈純赤如朱下足便爛能熟生

物時見赤魚游泳然此湯近歲大衰無舊日之觀竈門山属門庄内竈門村盖及後世割郷置莊始山与湯異其所属耳

湯今曰古市川東はと玖倍理湯井在郡西此湯井在郡西河

流入海といへり直山東岸口徑丈餘湯色黑塗常不流人竊到井邊發聲大

言驚鳴沸騰一丈餘許其氣熾熱不可向昵縁邊草木悉皆

枯萎因曰愠湯井俗語曰玖倍理湯井と云る井も何也箋

此湯井今属石垣莊鐵輪村其山多生硫黄土脈甚熱外

処有温湯所謂湯井小池也潤二丈餘深丈餘旁有小洞温

泉出焉盈枯自有定候將盈則霹靂鳴動熱湯奮發炎氣特

甚土俗呼曰鬼山地獄河直山鐵輪山也久倍理者燒之俗

言猶言火尔久倍はと大分郡小酒水在郡西此水之源出郡

留也と云る西柏野之磐中指南下流其色如酒水味少酸焉用療痲

謂吟と云る水もあ也箋釈酒氷冷呼曰柏野川属賀來

太氣と云る水もあ也郷南行入堂尻川療痲者案郡西

与速見郡接壤故受鶴見硫礬氣脈伏行地中發于此故然

己と云り博物志凡水源有石硫黄其泉則温とも見也

志加れむ此地をゆ出る湯を伊豫固まで下樋を通して

流し給する残持渡來坐也下樋とは語傳とる外らむ在地中

を通し給ふを云ふまむ謂也○持渡來而云く此を釋紀

今此印本よ持渡來以宿奈毘古奈命而とる以字は衍

あ也今此一寫本ふあ死よ依て文を成せめ事狀を思ふ

小も決^キ然^ニて大名牟遲神此^ヲ瘁坐^ル哉。少毘古那神の治^シ
給ふべき事ありけ^レ也。○漬浴則^ニ也。本よ浴漬者とあり。漬
とるよ依意を取^テ美曾^ク岐志加^バ婆^ト訓^シ。體^ニ濯^ル此^ノ義^ヲ
改^メ然^ニ也。本よ贅間有と有りき。志麻斯富^ホ杼^チ有^リ氏^ト訓^ベし。
○活起居然^ニ也。意を得^テ活^キ起^テ麻志^シ氏^ト訓^ベし。前文よ欲
る結○眞^ニ贅^ニ寢^ル哉^ハ。麻志^シ婆^ト斯^シ伊^イ奴^ヌ琉^ル加^カ毛^モと訓^シ。神武
天皇卷^ムよ。天皇此^ノ惡^ク神^ノ氣^ヲ遠^ク延^テ坐^ル時^ニ寤^リ起^テ詔^シ長^ク寢^ル
乎^ト。何^レ處^ニ也。師^ノ說^ハふ。夫^レは惡^ク神^ノ氣^ヲ瘁^ク坐^ルま^とをば。
御^ミ自^ミ所^シ思^ハ賜^ハ也。唯^ニ何^トと^テ敢^テ長^ク眠^ル也。故^ニと^テ所^シ思^ハ看^テ。如^ク此^ノ
を詔^シへ^テ協^スふ^也。と言^ハま^スと^テ協^ス。此^も全^ク同^クし趣^{あり}。○詠^曰也。

能^リ理^ル多^ク麻^ヒ比^ヒ也。訓^シ。唯^ニの御^ノ言^トと^テい^さく^り異^ニして。
詠^給予^ル意^{あり}何^れ故^よ。此^ノ字^ヲを^テ書^キり^テ見^ゆ也。○踐^健也。天^照
大^御神^ノ御^稜威^ハ此^ノ處^ニも^テ出^と也。第三十二段の傳見べし。○跡^處。二
字^ノも^テ阿^登と^も訓^シ。然^レど。外^ニ阿^登と^も許^呂と^も訓^シ。
光明皇后此佛足石の御哥よ。弥蘇知阿麻利布多都乃加
多知夜蘇久佐等胃太礼口比止乃布美志阿止く己呂麻
礼尔母阿留○於^今云^くは。今^と也。此^ノ風^土記^ヲを^テ記^セる^時
を^テ云^ふ也。延^長よ^テ奏^進れ^る記^ヲも^テ見^ゆ也。是^レは。當^昔也。
其^ノ跡^有しと聞^える^也。今をいふよ有む尋ぬべし。○温^泉也。和^名抄^ふ。
温^泉。一^ニ云^ふ湯^泉。和^名由^と何^まと。伊^傳由^と訓^シ。泉^ハ出^づ
水^ハ此^ノ義^{あり}る^也。對^テ予^テ出^湯ノ義^{あり}也。あはよ由と訓をり
を語の調もよろし。

哥よち出湯と儲ままと和名抄よ伊豫国温泉郡あり。訓よ詠れらへり。風土記よ湯郡と作き此の本文よ採れる事の連よ凡湯之貴奇不神世時耳於今世深疹病萬生爲除病存身要藥也。天皇等於湯幸行降坐五度也。以大帶日子天皇與大后八坂入姫命二軀爲一度也。景行天皇紀よ此幸れよ以帶中日子天皇與大后息長帶姫命二軀爲一度也。仲哀天皇紀よ此事見えび二年と云年此三月南園を巡狩し給へる事あり其時おぢの事よ也然れど皇后字留免てと有れ以上宮聖德皇子爲一度云々。此よ湯岡側小給へる事を委く記せれど今要とあき事ある以岡本天皇故よ切免於さて此事も推古天皇紀よ見えび以岡本天皇竝皇后二軀爲一度云々。此よ云々切とる臣木比米島おど此事よて此よ要と

あき事おれむ畧きて舒明天皇卷十二年十以後岡本天皇近江大津宮御宇天皇淨見原宮御宇天皇三軀爲一度此謂幸行五度也とあり。斎明天皇紀よ七年正月御船泊時の事れ往昔かく天皇命とち此幸行あてしを思ふよ。甚く驗有し温泉を聞えあり。命よちの御く世くよ注をも合せ。ちて神名式よ。此郡よ湯神社あり。祭神を大己貴見べし。少彦名命ありと或書どもふ云子也。冥然るは。冷も道の後と云処よ温泉ありて諸人浴び温泉の上。仍とある小社。此れち湯神社ありと因人此説あり。云よめ以下は伊豆国風土記よ。稽温泉玄古天孫未降也。大己貴尊與少彦名命我秋津洲憫民天折始製藥湯泉之

術伊津神湯又其數而箱根之元湯是也。走湯者不然養非

尋常出湯一晝夕二度山岸屈中火焰隆發而出溫泉甚烈。

鈍沸湯以桶盛湯浸身者諸病悉治とある是也以上を採

れ也。走湯云くハモと大字は書連これと文の横あれを

はて成文は擧とる文は義を二柱神民は病を憫みて諸

國處く小温泉を數所出し給子ゆぐ伊豆國の神湯と云

も其數よて此を箱根元湯ぞと云る也也。伊豆をいふ

應神天皇卷神湯とは神の始給子る意を元よりよて其

湯は神くちき義ある也。右は奉と依風土記の文は非

も思ふはて伊豆國を温泉此多る國あれ何の温泉

此おとれらむと國人よ逢ごせよ如此言ひ傳ふる湯は

アヤヤ探ぬるよ今は此名を知れる人稀あるが熱海の

温泉を舊く然も云牙ゆとし古老の物語れ也と云人の

也。是小依て此國の事記せゆ書どもを集めて見るよ。ま

お熱海と云地を東北に極よて走湯山よ近く今は町屋

も多く立竝とるが温泉の源を町をり西北に在て淖の

満干ふ從ひ晝夜よ六度むか也。沸騰こと甚烈く鹽辛死

こと淖よ異あらば其湯源の上よ湯宮を云社に也町家

ある湯を此湯源を竹樋を通して引來るとぞ。林羅山

丙辰紀行よも走湯より一里むり西に温湯あり其名
を熱海と名おらて人の万に病あるもの浴をれを驗あ

り先年余も人よ誘われて湯よ入て登りし其漏とて
を見るよ。津の進退ふたりて岩の間より煙むし上りて
人の近づくはくもあらぬ不ど熱湯涌出流ま
走るを窺をうけて家くよせ也。槽よ湛へて人く入ら
べと記さ。上ふ引とる風土記説ふとく符牙り。湯宮を云
は。此れ二柱神あはこと言まくも更れ也。熱海温泉記と
熱海の温泉を往昔この海中よ。温泉俄よ涌出たり。是よ
依て彼、辺此魚類忽よ爛死て磯ふち揚ること山の如
し。人更よ海中よ。温泉ある事知らぬ。爰よ万巻上人と
云。沙門ありとほ。此所よ來れるが海よ。温泉ありし
しとて。海人を入きて尋させぬ。果して温泉ありし
う。む。薬師の冥慮を仰ぎ。此温泉を里よ。祈して。諸人此
為よ。功德せむとて。一七日祈ける。忽よ。温泉山下よ。涌
出たり。里人奇み思ひぬるよ。薬師如來。里人の夢よ。告て
病ある者。この温泉よ。浴せしと。同よ。告く。里人一致
して。即社を草創して。温泉守護。神を崇め奉る。今此湯前
権現是ありとて。季く此湯の功能をも記せり。功能を然
る言ふれ。上。件の趣を。二柱神。此所よ。湯を出し給ひ

けむ古傳の遺れるよ。例の佛風此説どもを打交へて。妄
説せる物と見え。とり。二柱神を薬師を申せること。更よ
珍らし。ちて箱根を。桓武天皇紀よ。は。管荷とも有て。相模
と駿河との堺あるが。相模よ。屬る足柄山の嶺。續よて。万
葉よ。足柄乃。管根飛超行。鶴乃云く。まよ。安思我良能波姑
禰乃夜麻爾云く。れど。足柄此と詠ぬれ。古よ。也。相模。因
よ。屬と也。あ。不足柄。管根のこと。景。箱根。元湯。是也。と
は。箱根よ。蘆湯。木賀。底倉。宮城野。湯本を始。久。數所よ。ある
湯の元を。伊豆。因。此。神湯。ありと云。る。義と通也。然れ。む。其
間。八。隔と。ま。と。大分。速見。此。湯を。下。樋。を。め。伊。豫。因。よ。渡。し
坐。る。よ。進。牙。て。思。へ。む。此。も。地。下。よ。む。綫。筋。も。下。樋。を。通。し

て。神湯を渡し給へ依あす。斯て此嶺ふ。式外あるが大社
あす。祭神を書等よ。天忍穗耳尊とも。彦火瓊杵尊とも。
彦火々出見尊とも有ますと。此因邊よ。右の天皇命神とち
此齋はれ給ふべき由あり。此由を古学小明あら然れむ
決免て此段ある。二柱神を祭する社あ依べし。神名式考
郡楊原神社を今日伊豆権現云々とあり。此は何れ依て
云ふ。能く考ふべし。さて宮根山縁起といふ物よ。相州
西富郡足柄有勝絶仙窟孝昭天皇蓋代之始。聖占仙人漸
排駒形扉而爲神仙宮岳左有並肩巔長生妙術之聖藥籠
之祿山者異其名而同其跡。元正天皇養老年中。洛邑有沙
弥称万卷上人。巡行諸州。靈嶺。祿山。練行。一夕有聖夢。三輩
各告云。我等斯山之舊主也。万卷夢醒矣。聖瑞遠達。天聡即
爲勅願造。梵宮奉崇。三容於一社。号箱根三所。權現主。實有
五等駒形。能善左之右之。昔日有神仙。閱彼聖地。而裁谷神
妙藥。自尔此來。奇花異草。谷良。医雖有其證。人所未識。耳岳

是駒形應化之權扉也。又能善者自熊野山詣彼山。挽而留
之。駒形恣神力。今蒙驗德。傾医王宝瓶。而與如意良藥矣。能
善現威光。助其力矣。とある。少医事よ由緒ある。信救と云
べし。但し此縁起を建久二年。小南都興福寺の。長き説と云
る僧の書る物よ。て例の佛風を附會とる。いと長き説と云
れど。今を古傳ふ本。扱きて書る。あらむ。と思ふ限の。此
要阿る。処此。みを甚く切。免て引出る。あり。万卷が。と
神社考。ま。と。詳節よ。と。満月と。何れ。熱海湯を。も。此。僧。此。開
と。ゆ。と。云。ひ。ま。と。箱根縁起よ。天平勝宝元年。詣。常。鹿。島。
聖社。建。神。宮。寺。と。見。え。此。事。鹿。島。社。例。傳。記。よ。も。委。く。見。と
れ。む。東。固。を。巡。行。ゆ。人。を。惑。え。し。処。に。此。聖。山。聖。社。を。佛
法。風。よ。引。と。免。て。種。々。妄。説。を。作。り。遺。せ。る。妖。僧。ふ。ぞ。何。り
依。り。て。上。ふ。引。と。る。伊。豆。風。土。記。ふ。走。湯。者。不。然。養。老。年。中。
開基と何依む。箱根山ある湯どもは。伊豆因の神湯を元
湯ふして。此の二柱神。此始。給子依あまぎ。走湯む。此二神
此始。給へ依湯よ。非安。元正天皇。此養老年中。小開基と

依湯ぞを云ふ也。行囊抄よ、舊記云、仁明天皇承和二年、
舊記の名も知られ、然まむ風土記よ、養老年中を云ふ、
よ依るべし、箱根の湯をも、養老年中よ、万卷上人が開々
由ふま、此も彼が開々る、熱海の湯も、彼僧が開々る、
は伊豆山とぬ、走湯山をも云、山よて、熱海北北ふ當りて、
共尔伊豆、因加茂郡あり、箱根とて、南北山あるが、海
さし出て、山中よ湯あり、謂ゆ、依走湯是あり、此山よ坐
神を、走湯神と申、鎌倉右大臣の哥よ、伊豆北山、此南
巴あり、走湯の神を、むむも云、早き神の志、依しあり、
山とむ、湯も云、羅山先生の丙辰紀行よ、走湯山とぬ、
伊豆山、此あり、侍る、此ふ坐、まは、神を、走湯権現を申、
いふし給ふ、二所参詣といふる、此あり、此所よ出湯あり、

り、石走る、滝の如し、走湯の名も、伊豆山縁起といふ物よ、
温湯よとて、この故りやとあり、
本宮は、天忍穗耳尊よて、相殿北左右ふ、天兒屋命、天太玉
命を祭る、此高根は、高天原とて、始て天降坐る地あり、
當山所傳如此、神社考、諸社一、孝昭天皇四十二年、彦火
瓊杵尊、湯泉の中より、光を放ちて、顯を給ひ、花香初
木姫よ託し給ふ、縁起六卷よ記し、ふ神秘といふ、有り、
古傳の存れる物と見えとて、但し、古全書の、此よ要と
せり、抑、此縁起を、近き頃記せ、見ゆる、大槪、古
縁起よ、扱とまど、ま、彼と異ある、信よ、し、き、説とあり、
古縁起とて、走湯山縁起を、云書よて、元本を、六卷あり、
世よ傳はる、五卷まであり、群書類、從よ、も、收、り、弘仁
延喜の頃を、次く、小記せる、奥書ありて、古書、れ、ま
ど、佛風ある、妄説多くて、大槪は、信ら、悉、然、書、あり、其、む、備

お應神天皇の二年四月、相模、圀唐濱といふ地、三
尺餘ある圓き靈鏡、現れ、光を放ち、或は高峯、飛登
り、或は海中、入る。仁徳天皇の二十七年八月、此靈鏡
光明を放ち、禁闕を照せり。勅使を遣ひ、尋ね、給
ふ。昔、西天、月蓋、依、釈迦、文佛、之、勅、奉、鑄、如、來、眞、像、吾、胤、尊
也。昔、此、金、像、故、下、自、高、天、原、住、月、氏、之、境、爰、如、來、化、緣、己、盡、催
重、漸、之、幸、我、隨、此、亦、東、向、棲、宿、三、韓、國、爰、神、后、討、三、韓、之、時
誘、云、自、今、以、後、神、達、于、本、朝、所、皈、依、之、金、像、可、迎、我、朝、我、聞
神、后、誘、承、諾、出、本、國、降、臨、倭、朝、と、神、託、あり、由、見、え、と
り、此、を、承、諾、す、要、ある、所、の、み、を、引、切、然、て、記、せ、る、が、此、説
を、附、會、せ、て、其、佛、像、を、尊、重、し、依、故、り、高、天、原、よ、り、天、竺、國
よ、下、ま、る、が、其、像、韓、國、牙、渡、れ、る、故、り、高、天、原、よ、り、天、竺、國
る、を、我、朝、よ、迎、ふ、べ、し、と、約、せ、し、故、り、本、朝、小、誘、ひ、我、が、等、ぶ、仏
渡、さ、依、先、小、か、く、神、託、有、し、を、妄、説、を、作、正、餘、さ、り、と、仏、像、の
神、人、あり、と、云、依、お、せ、凡、て、仏、好、せ、る、中、世、人、の、此、國、此、神
を、皆、本、を、仏、國、の、物、よ、せ、む、と、云、依、例、の、妄、事、れ、り、され、と
自、高、天、原、と、云、る、を、然、妄、が、ふ、此、處、此、神、を、天、忍、穗、耳、等、よ

て、高天原より降り、坐り、と云傳の有る故、其故事をも少
り、とり、入れ、て、かく、作、れ、る、物、と、見、え、と、り、斯、て、世、よ、傳
を、あ、し、六、卷、を、殊、お、秘、し、て、山、外、よ、出、さ、然、由、ある、は、然、る
古、傳、を、も、記、し、傳、り、と、る、故、り、其、を、あ、免、隱、れ、を、れ、ら、む
め、知、れ、ら、び、上、よ、奉、多、る、伊、豆、山、緣、起、小、六、卷、よ、記、し、て
神、秘、と、云、を、云、る、然、依、は、天、忍、穗、耳、尊、此、嶺、小、天、降、坐
ま、と、云、お、と、古、書、よ、見、え、云、此、を、高、天、原、小、神、留、坐、に、神、お
依、よ、か、く、依、傳、の、有、お、と、を、不、審、み、思、ふ、も、有、は、ら、ま、と、此
を、天、照、大、御、神、也、日、嗣、此、御、子、よ、御、坐、し、て、大、御、神、の、詔、命
お、依、て、此、國、を、治、看、さ、む、を、天、降、坐、る、が、國、此、狀、を、臨、眺、ま
し、多、甚、く、喧、は、る、國、お、正、と、詔、ひ、て、還、上、は、し、て、其、由、を、白
志、國、平、竟、て、後、よ、其、御、子、彥、火、瓊、杵、尊、を、降、し、給、へ、也、百

段をり次々の傳然れど此固形臨眺ませる時よ此嶺
を見て知べし。小天降坐る事此の傳の遺るよやを所念也
あす。正しき古書よ見ぢる事を傍に書よ記し傳へ或
ふも信よ正しき説ほと彦火瓊杵尊此湯泉の中と
むい程もあり。顯はま給すたと云え信が多た説あまど伊豆風土記
日金嶽祭瓊杵尊荒御魂云々。此云くを奥野神獵年
納狩具行装之次第有図記推古天皇御宇伊豆甲斐兩國
之間聖德太子御類多自此獵鞍停止八枚別所往古獵鞍
之司祭神号幣坐神坐其舊法断久也夏野獵鞍者伊藤奥
野毎年撰鹿柵射手とあるを切然とあり此よ然しも
要ふれや有れむ此神も此所よ由有るむとは知られ
とす。日金嶽は走湯山と嶺おきて舊名を久地良山と

云するとし。走湯山縁起よ見えたとす。但し此嶺よ就ても
れど総て信のた説あまど記さげ神社考詳節走湯の
所よ俗説伊豆權現者彦火瓊杵等とあるを日金神
と走湯神と混み誤るれゆ伊豆山縁起よ彦火瓊杵等
とる説も有りまよ北條盛衰記よ彦火瓊杵等混ひ
やがて走湯神とて高麗國より相模國那賀郡の山中
よ降り給す故よ其所を高麗寺といひて趾を残り
と云ふは箱根山縁起よ神功皇后討三韓後有武内大臣
奏云奉請異朝大神而令祈願天下長安寧矣即奉遷百濟
明神日州奉遷新羅明神于江州奉移高麗大神和光于當
州大磯登峯因名高麗寺と云ふ妄説を再傳へ誤れる説
ありまよ藻塩草と云哥書よ日本紀竟宴哥よ藤原博文
の王辰爾を得て世中よ君無むせむ鳥羽よかひる言葉
を亦不消れましと詠る哥を奉て敏達天皇の御時異國
をり鳥羽よけける状を渡せるよ讀む人無りぬ依り
辰尔と云人齧おて蒸して中此縮よ写しとす伊豆國を望み
れむ御門圍を望み申せを仰せぬ依り伊豆國を望み
て下されぬ今伊豆權現是ありと有す此を敏達天
皇紀元年五月此処よ見とる事れり高麗國とす上れ

る表あり然れど因を望み申せと詔ひて伊豆因を賜へ
る云と云は古書より於見え此在古縁起高麗
因靈光玉獻鳥羽之文儒者不明了以宣使祈權現權現變
人躰今読之といふる安説多ま誤り傳とる説あるべ
し應神天皇紀五年十月の下科伊豆因令造船長十丈
船既成之試浮于海便輕疾行如馳故名其船曰枯野と
有を伊豆風土記より引て此舟木者日金山麓奥野之楠也
是本朝造大船始也と見え和名抄も田方郡も狩野と見
え延喜式も輕野とある處ふて東鑑も狩野庄と見え此
を伊豆志小枯野の船木此出とる處ありと云ひ欽明天
皇紀も十四年七月此處了以王辰爾為船長因賜姓為船
史今船連之先也とある處を思ひとせて種考へと
れど此人の伊豆因より由儲まと走湯山縁起ふ當山此地
あると云ふ更に見えは儲まと走湯山縁起ふ當山此地
主神此事を記えて根元地主有二神一者白道明神其體
男形也二者早追權現其體女形也と云ひまと地主白道
明神也世人號來大明神是也とも有といと古く此山を

宇須波伎坐る神と云と聞也然まと來大明神といふ義
代も天皇の道鏡を竈幸ひ給ふことを走湯神此怒りて
高麗因に移り給ふるを地主神已たり往て誘ひ來れる
故に來明神と云依説を信らまは但し早追神と云は此
其御妻神ある由云は然も有は思は依説なり此
神を伊豆山縁起ふ地主白道明神と五十猛神と云世人
來宮明神と稱は又曰紀伊宮乃素盞鳥等御子也とある
是信の説あり其に神名式も加茂郡も杉梓別命神社と
ある社も今も田中村といふに在て此に五十猛神を祭
れ依社あるが木宮大明神を申せ也然るは紀伊因も坐
る神依社を此因も移し奉れる故もかく稱せ也社事此
に第六十七段の傳も然まは走湯もも此神始給ひ
委く注せるを見べし

らむ故よ。上古とて此は鎮坐しなむ。後よ天忍穗耳命
此。此嶺小天降坐るおと有しと云傳ふ依て。走湯神を齋
ひ祭也。まゝ養老年中よ。此の湯よ浴るおとを始、於るお
るばし。是を以て風土記ふ。此山此湯を大汝少彦名、
神よを係ざるあり。甚精しき傳あり。凡不 凡不
因ふ。湯泉のおをよ就て。此段此二柱神を祭れる社を言
はぐ。まお攝津、固有馬郡よも温泉ありて。上代の天皇と
ちも御幸あてしおと。因史ふ數見えとて。神名式よ。此郡
小湯泉神社。大月次、新嘗、 まゝ有間神社おと。あは共。此二
柱神を祭れ也とぞ。湯泉神社のおをを親長記よ。湯山明
神、三輪明神ありと云。千載集よ。有馬
此湯よ。忍びて御幸有る。湯此明神を。三輪明神とあ
む申と。閑て。免於らし。御幸を三輪の神あらむ。あは

し有馬の出湯あるべしと見也。今も湯山町と云よ在て。
神界よ温泉あり。色葉字類抄よ。温泉三和社。舊記云。大神
温泉。鹿舌也。崇神天皇御宇之時。七年始被定置。神戶云々
おと見え。有間神社。熊野三輪鹿舌の三座よ。鹿舌神
とて。少彦名命あり。今ハ香下村あり。鹿舌山といふ。在
て。鹿舌明神と申。いと諸書よ云。ひ攝津志ふ。在中村。属
邑西尾。今称山王。近隣七村。所祭。村民平日忌穢。婦人産期
出。就水涯。分娩。未嘗有産死者。とい。牙ゆ。何れ。是。ある。こ
とを。知。は。上野。因。群。馬。郡。ふ。伊。加。保。神。社。と。あ。は。社
ら。は。祭。神。も。今。は。湯。前。大。明。神。と。い。牙。と。も。少。毘。古。那。神。あり
とぞ。一説ふ。元湯彦友命。又名彦由支命と申。いと。此社
此おを記せる物よ見えとて。元湯彦友命。彦由支命とい
ふ神名。古書ふ未見當らば。決然て少彦名命。此亦名ある
はく所念也。此社のあ。と。因史。承和元年。九月辛未。以上
野。因。群。馬。郡。伊。加。保。社。預。名。神。同。六。年。六。月。甲

申奉授上野國無位御賀保神從五位下貞觀五年十月七日
日上野國正六位上若伊賀保神從五位下同十一年十二
月廿五日正五位下伊賀保神正五位上同十八年四月十
日授正五位上伊賀保神從四位下元慶四年五月廿五日
授伊賀保神從四位上同年十月十四日授正五位下伊賀
保神正五位上あど見也但し此十月十四日ある正五位
誤おるべし此所よ謂也依伊加保の温泉ありま此社
お並びて椿名神社とある社也今榛名山といふ山よ在
て俗よ満行宮大權現也云此神も元湯彦命ありと社説
あり一説お中よ伊特諾伊特冉等左右を國常立等大己
榛の誤ありぞ云ちて万葉十四卷上野歌小伊香保呂能
蘇比乃波里波良と詠る二首あり伊香保呂と云伊香
助あり蘇比乃波里波良を傍の榛原ありは詞の
正榛名山の地名よ由ありてた本也はと可美都氣努

伊可保乃奴麻爾云々詠るもあり此沼也伊加保山の
半上よ在て周二里許あり沼此三方お山とも立並び
一方を開々野あり今は榛名の御手洗といふ仙覺抄
小伊香保乃沼也請雨の使と於所あり也有也今も此御
手洗の水を借りて雨祈あ依よ必祥ありとぞ御手洗此
よ此山お神奴よ云へお神おまをし竹筒よ入れて取
るを幾布と遠き所ありとも途よ宿ること休らふこと
叶はあもし途お滞るお死を其所小雨降て雨を乞ふ所
よ験あり故休まば歸りて雨を欲き地のうぎ也其竹筒
を持廻りてまお本へ返然あま決免て雨降らはと
云ことおれしとぞあ布此山を詠る哥万葉十四卷よ數見
え古今集長哥よも
いお布の沼れい
おして思お心を
云くおどあり

雨
甘
蘇
林
萬葉集
宇賀志
抄
人

爾復二柱神爲宇都志伎青人
コ、ニマタフタバシラノカミタメウツシキアラヒト
 草及畜産則定其療病方又爲
クサマタケモノノニハサダメツノクヌルヤヒラミチラマタシテ
 攘鳥獸昆虫出災異則定給其
ハラハトトリケダモノハフムレノワザハヒラハサダメタヒソノ
 禁厭法矣是以百姓至于今咸
マジンナヒノワザラキコハラモテオホミタカライタルマデイニコトク
 蒙其恩賴而皆有效驗復此少
カ、フリソノミタマノフユラニミナアリシレマタコノスクナ

毘古那神者作始酒出神也故
ビコナノカミハツクリハジメサケラシカミナリカレ

亦謂久斯神
マタラスクシノカミト

宇都志伎青人草ハ上出て既注予也。○畜産を舊く
ウツシキ
 氣母能と訓ひよ依はし其を師説よ和名抄ふ獸和名介
ケモ
 毛乃畜和名介太毛乃とあるは相誤れるあり神代紀ふ
モノ
 畜産を氣母能と訓み獸を氣陀母能と訓るを正し死皇
ウツシキ
 極天皇紀天武天皇紀あどふ六畜を有をも牟久佐乃氣
ウツシキ
 母能と訓也然れど畜ハ氣母能獸ハ氣陀母能あり後ふ
ウツシキ

源氏物語帚木卷。漢國のはげし氣陀母能とあるも、
虎よて獸あり。古今集長哥よ薬けがせるも、
詠るた。宋た雞犬あまども雲ふ吠むと詠れむ。此哥よ
てた犬あり。然れば畜れぐら。是も獸の方よとりてぞけ
ごものとはて氣陀母能を毛津物此意あるはし。古書よ
毛和物。毛鹿物とも云。氣母能を飼物の加比を切て
伎あるを氣を云るれり。伎と氣とを殊よ親く毛物の意
よを何れむ。六畜ハ。人此家飼たく物れまば。飼物と云
あ。然係よ氣陀母能と氣母能と似とる名あ依故よ。紛
はし死ぞかし。と言れしは。案然る説あり。上、件の師説を
見え。其は大祓詞ふ畜犯罪と何依同事を。古事記よ。馬
婚。牛婚。雞婚。犬婚と何。此を皆飼物ある。戎以て知はし。

さて六畜と云。馬牛雞犬よ。羊豕を加へて云。あまども。此
は漢土の定りて。元は皇國の事。非然るを漢國より
を。羊豕を食料よ飼おく故。云牙まど。此二畜は元より
皇國よ産れる物。非ざまむ。古事記よ。馬牛雞犬を奉
るは古あり。天武天皇紀よ。莫食。牛馬犬。猴雞之穴。とあり
て。猿を加。られとまど。此も飼置て益あき物あり。漢籍襄
陽記と云。物よ雞。主司晨。犬。主吠盜。牛。負重載。馬。涉遠路。云
云。ぞ。云るぞ。古。小。叶。子。る。説。ある。強。て。飼。物。を。加。む。と。あ。ら
ば。猫。を。や。加。げ。う。ら。む。此。を。○。定。其。療。病。方。療。字。を。舊。く。衰
必。飼。ふ。べ。き。物。あ。ま。む。あり。其。を。統。紀。四。の。詔。よ。御。病。乎。治。賜
佐。牟。と。訓。る。も。惡。か。ら。ぬ。ぞ。ま。と。九。九。此。詔。よ。御。病。乎。治。賜
比。あ。ま。も。有。久。須。く。琉。と。訓。は。し。舊。訓。を。集。め。る。玉。篇。よ。
れ。む。れ。り。然。る。訓。の。有。ま。む。あ。り。此。を。己。猶。若。き。時。よ。下。に。注。せ。る。久
訓。ま。欲。き。由。を。信。友。よ。語。り。し。然。る。を。未。だ。久。須。理。を
を。後。よ。見。出。て。告。遣。せ。る。あり。云。語。を。い。ち。か。も。古。語。の。様。を。知。ら。む。者。を。藥。師。の。術

る事。多くは無_レむと所_レ念_レ也。吾情_レ本_レ打_レ振_レる_レ本_レふる_レ思_レふ_レよ。故_レ今_レ世_レも誰_レもま_レれ_レ過_レち_レて身_レを_レ打_レ振_レる_レ時_レれ_レど。阿_レ那_レ痛_レと云_レさ_レは_レよ。所_レ念_レえ_レば_レ指_レよ_レ津_レ吐_レぬ_レて_レ久_レ須_レる_レ事_レあり。是_レぞ_レ皇_レ産_レ靈_レ大_レ神_レの_レ賦_レて_レ賜_レへ_レる_レ良_レ医_レの_レ性_レよ_レて。や_レが_レて_レ久_レ須_レ理_レの_レ始_レある_レ口_レふ_レ苦_レし_レき_レ飲_レ藥_レ此_レ後_レある_レは_レき。こと_レ是_レを_レ以_レて_レ其_レ此_レ時_レ二_レ柱_レ神_レ此_レ定_レ給_レ予_レ依_レ病_レを_レ療_レは_レ依。も_レ悟_レり_レお_レべ_レし_レ其_レ此_レ時_レ二_レ柱_レ神_レ此_レ定_レ給_レ予_レ依_レ病_レを_レ療_レは_レ依。方_レを_レ云_レふ_レは_レ種_レく_レ此_レ傳_レる_レ久_レ須_レ理_レを_レ更_レえ_レり。飲_レ藥_レ此_レ方_レを_レも。多く_レ定_レ免_レて_レ後_レの_レ設_レと_レ爲_レ給_レひ_レむ_レぐ。聚_レ方_レ神_レ遺_レ方_レか_レど_レよ。此_レ二_レ柱_レ神_レ此_レ傳_レ予_レ給_レへ_レり_レを_レい_レふ_レ飲_レ藥_レの_レ方_レ此_レ多_レう_レ上_レ代_レる_レを_レ以_レて_レ云_レあり_レ此_レ二_レ書_レの_レ事_レ此_レ下_レよ_レ云_レを_レ見_レと_レ。は_レ人_レ情_レお_レお_レら_レら_レ恬_レ憺_レ事_レ少_レく_レ純_レ固_レ質_レ朴_レふ_レて_レ健_レ然_レか。ま_レむ_レ裡_レと_レ發_レる_レ病_レの_レ少_レ有_レし_レ故_レよ_レ後_レ此_レ如_レく_レ飲_レ藥_レを_レ用_レさ。む_レむ_レう_レし。彼_レ事_レ多_レく_レは_レう_レし_レら_レぶ_レる_レ漢_レ土_レは_レら_レも_レ上_レ古_レの。人_レを_レ春_レ秋_レを_レあ_レ百_レ歳_レを_レ涉_レり_レて_レ動_レ作_レ衰_レへ_レば_レと。

素問の上_レ古_レ天_レ眞_レ論_レと云_レよ_レ見_レえ_レ恬_レ憺_レ虚_レ無_レ眞_レ氣_レ從_レ之_レ精_レ神。内_レ守_レ病_レ安_レ從_レ來_レあ_レぞ_レ云_レる_レを_レも_レ思_レふ_レべ_レし_レあ_レ不_レ漢_レ籍_レよ_レか。る_レ類_レ此_レ語_レを_レ甚_レ多_レり_レ依_レる_レ。は_レて_レ方_レ字_レは_レ美_レ知_レと_レ訓_レる_レし。師_レ云_レ。今_レを_レ其_レ端_レを_レい_レふ_レのみ。を_レサ_レマ_レとも_レ訓_レま_レど_レ。此_レ此_レ療_レ病_レ方_レを_レ人_レ草_レは_レ更_レあ_レす。人_レ草_レよ。然_レは_レ訓_レは_レく_レぬ_レ非_レ也_レ。此_レ此_レ療_レ病_レ方_レを_レ人_レ草_レは_レ更_レあ_レす。人_レ草_レよ。要_レは_レ依_レ畜_レ物_レの_レ病_レを_レ療_レは_レ方_レを_レ人_レの_レ知_レは_レく_レ教_レ予_レ定_レ給_レ予_レる。由_レよ_レて_レ總_レて_レ此_レ鳥_レ獸_レふ_レ其_レ病_レを_レ自_レ治_レ去_レ方_レを_レ某_レく_レよ_レ定_レ免_レ教。予_レ給_レへ_レり。と云_レ予_レは_レ非_レざ_レる_レれ_レ也。古_レ來_レ此_レ注_レ者_レみ_レあ_レ思_レひ_レ謬。を_レ治_レ去_レ方_レを_レ知_レれる_レ事_レを_レ此_レよ_レ係_レり_レて_レ物_レ等_レの_レ自_レ然_レよ_レ其_レ病。此_レ譬_レへ_レむ_レ犬_レ猫_レあ_レぞ_レの_レ病_レある_レ時_レを_レ自_レら_レ稻_レ葉_レふ_レ似_レと_レる_レ類。の_レ草_レを_レ食_レひ_レて_レ吐_レき_レ翡_レ翠_レと云_レ鳥_レの_レ岩_レ間_レ此_レ穴_レよ_レ巢_レを_レ作_レ依。が_レ蛇_レ此_レ入_レむ_レ事_レを_レ恐_レま_レて_レ穴_レ口_レふ_レ蛙_レ蟪_レと云_レ虫_レ此_レ粘_レ汁_レを_レく。に_レ正_レ置_レき_レ蜘蛛_レ此_レ蜂_レふ_レ刺_レれ_レと_レる_レが_レ芋_レ此_レ葉_レを_レ齧_レお_レら_レ大_レ魚。よ_レ身_レを_レう_レち_レ傷_レハ_レま_レと_レる_レ小_レ魚_レと_レも_レ此_レ眞_レ水_レ此_レ入_レ江_レふ_レ來_レて。愈_レ去_レ類_レも_レ云_レも_レて_レ行_レら_レと_レ此_レ此_レ由_レ縁_レと_レ事_レ異_レあ_レす_レと_レ然。く_レ知_レれる_レよ_レを_レ有_レれ_レど_レ此_レ此_レ由_レ縁_レと_レ事_レ異_レあ_レす_レと_レ然。

れむ上よ云乎。牛馬雞犬あぢ此病を療は方字も道ふ
志させる人。明紀居べき事ふこそ。○鳥獸昆虫之災異。
鳥獸ハ。和名抄ふ。爾雅註云。二足而羽者曰禽。和名与鳥一
同止里。
說飛曰鳥走曰獸。總謂之禽。毛詩注云。鳥之雄雌。和名上乎
止利鳥父
也。下米度。不別者以翼知之。右掩左雄。左掩右雌也。とあり。已。
篤胤按ふ。右掩左雄。左掩右雌也。と有るは道理ふ違ふ
正と所念也。然るに凡て男を左上とる定まりあるを若
くは此抄ふ引誤れるよやぞ思ひて。爾雅の
本書を見るに。いので其家物を試し見ばやと思ひお。
異あゆ事あし。
暇ふくて年月過おるを教子ぬる。下總入宮負定雄を。齡
若らまど。か。ゆ事ふ。心字用ふゆ性あゆが。即雀鳥鳩あ

ぢ。其なり雌雄比分ち難き物等を。ほま。と試み多ゆ。果
して。和名抄ふ見えある所を。を異あり。其後ふ。本草綱目
を。見まむ。陶弘景が説。ま。と日華外とよ云る所も。共ふ。其
翼左覆。右者。是雄。右覆。左者。是雌。と有る。然れば。爾雅の説
誤。あゆこと。炳焉し。と云乎。家ふ。然る説あり。あふこれ
定雄が禽
獸草木に限らば。万物に雌雄牝牡ある事。も考へて。季く記せる物あり。獸を氣陀母能と訓
む由を。既ふ注す。昆虫に。舊く波布牟志と訓るを用ふ
也。訓。波
布。と有。殘も。かく訓免り。和名抄ふ。蚊行。唐韻云。虫行
也。訓。波。也。見え。虫。唐韻云。鱗介。總名也。与蟲通用
和名無之。とあり。大
祓詞も。昆虫乃災とあり。就て。師此後釋ふ。雄畧天皇

此御歌よ。波布牟志母也。虫は這ふ物ある故。凡て
虫を然云ふ。鳥を飛鳥と云ふ。同じ。雨花をさく。花
と云類ひも。同。大殿祭詞よも。波府虫能禍無く。見え。十
種神寶の中。蛇比禮蜂比禮。あるも。其を拂む。料
ふ。上代。は民の住所。野山。交。て。假初。あ。構。あ。て
し。う。ば。虫。此。害。多。う。て。し。あ。ゆ。を。し。ま。と。大。殿。祭。の。祝。詞。ふ
す。む。上。代。の。唯。あ。は。て。此。害。の。多。有。し。も。有。べ。し。今。世
と。て。も。蝮。蜈。蚣。蜂。れ。ど。よ。刺。れ。て。惱。む。あ。と。無。き。よ。非。交。
せ。の。て。此。は。猶。精。く。言。は。く。凡。て。此。鳥。獸。昆。虫。此。災。異。と
あるを。某の鳥獸。某此虫。あ。と。名。を。ち。言。む。中。に。よ。精。
から。び。凡。て。禽。類。ま。と。蟲。類。れ。ぞ。何。ふ。は。ま。人。草。は。更。れ。ぬ。

畜産よも災害をれし。異變をあらは物を云。弘く見依
は。し。あ。ち。大。き。よ。云。は。く。草。木。よ。ま。れ。何。あ。る。ま。人。の。要。と
れ。る。物。の。害。を。あ。ら。は。む。や。が。て。人。は。災。害。を。あ。ら。は。し。謂。れ
ま。ば。其。を。も。兼。て。思。ふ。べ。し。鳥。の。穂。を。あ。み。菓。を。と。り。獸。は
穀。物。を。喰。害。ひ。虫。の。木。草。よ。付。あ。と。も。悉。く。人。の。災。害。よ。非
め。ざ。ら。其。の。物。等。此。殊。ふ。人。は。爲。ふ。災。異。を。あ。ら。は。し。耳。あ。ら。び。彼
等。が。性。の。ま。え。く。爲。は。態。も。人。の。爲。よ。宜。か。ら。ぬ。事。を。即
人。は。禍。あ。ま。む。呪。術。を。以。て。禳。ハ。ゆ。事。ど。も。今。世。よ。も。多
死。を。以。て。辨。ふ。は。し。然。る。を。此。世。を。神。此。御。世。ふ。て。人。の。現
世。を。る。は。寓。居。あ。ゆ。字。物。等。は。幽。世。よ。屬。く。理。あ。る。故。ふ。
神。此。御。定。坐。る。法。を。自然。小。應。へ。畏。む。由。の。ゆ。故。と。思。え
は。此。理。を。上。よ。も。下。ふ。も。漸。く。よ。云。る。を。思。ひ。合。せ。て。知。べ
し。世。人。は。凡。て。異。変。と。云。す。狐。狸。の。名。を。此。み。云。え。れ

ど弘く心を著る察るも。家も物として、異変を為さるを
あしと見ゆ。多し其の中。狐狸あまの態を、常多し故よ。
此等が名を此み指あまど。凡て物此異変を、態をあはハ
神も属けむあり。然れむ物の異変を、物よとりてを異変
よ非変、常性れむを、人とは世此異あけて世小兒の病
る故。人は異変と思ふ。有りは。けりて世小兒の病
を多く虫といひ。大人よも何虫彼虫を云ひ。田虫。目虫。水
虫。あど云も。家も虫此態あるが有て。呪術よて治るも多
か。然まむ是も神世と。己の古語を依はし。但し此を尋
よを信ざり。事あるが。己も前よた。あ。此言種と此み思
ずりしを。西洋此説。人此依て。微き物を見る。目鏡
をもて。田虫。目虫。水虫。まよ。疥癬あどの類を見とる。極
めて微き虫の有しあり。人の躰中よも虫多きこと。近頃
出とる虫鑑と云書。けり災異を。災害異變此義を以て。書
を見ても知べし。和邪波比を訓るよ従ふは
れと依よ。必有べりまど。舊く和邪波比を訓るよ従ふは

し。神よまれ物よはま。幽界と。己吾も害とれる事此ある
を云語あ。委くを第四十三段。万物之妖悉發矣。と。○禁
厭法を。前よた。麻自那比能。古本よ。麻自那比能。理と訓
依よ従ふはし。今本よ。禁厭を。マ。ジ。ナ。ヒ。ヤ。ム。ル。ノ。リ。や。あ
漢書高帝紀よ。東遊以厭之。注よ。禳也。と。麻自那比の麻
己。平。春。海。云。小。右。記。了。麻。志。奈。比。と。あり。麻自那比の麻
自は。御門祭。祝詞よ。麻自許利。大祓詞よ。蠱物。あどある麻
自と。同言ふて。那比。と。那比。商。那比。あど。此。那比。を。同く
辭あ。己。蠱。を。麻。自。と。訓。は。き。由。を。字。ち。て。此。三。詞。の。麻。自。も
を。同。言。よ。を。有。れ。ど。か。く。活。き。て。三。よ。れ。ま。る。上。よ。て。は。輕
重。と。物。と。の。差。別。を。成。せ。り。其。を。麻。自。那。比。を。麻。自。那。閉。今

て禁厭の法も神々此云々せと詔給へるあまは能理
といひ此法よ験ある事尤其御法を畏む謂ふれむ有る
る○序ふいふノ口フは法○百姓ハ意富美多訶羅と訓
とり出さる詞あらむ。江家次第ふ公御賤と
をし。舊訓よも然あり但しオ、ン。義と聞ゆ。故書紀ふ人民万民兆民黎民民庶あぞ此類
を皆然訓也。字典よ百姓民庶也とありあ不崇神。○至于
今は書紀を記さきと依當時を云う。若くは書紀ふ採ら
れし古書よ本を已有し文う。もし然も有らば其時代ハ

知ぼららび。○恩頼を舊く美多麻能布由と訓るよ依ほ
し。まよ布恵と垂仁天皇紀よ頼聖帝之神靈景行天皇紀
ふ皇靈之威神功皇后卷ふ皇后の御語ふ吾被神祇之教
頼皇祖之靈云々蒙神祇之靈あぞも有也。多見えたり。
天慶六年日本紀竟宴よ得大己貴大神矢田部宿禰公望
因平し梓此末と傳へ來る美太麻農扶由はらふぞう
れし起あど有ゆ。○因天の玉をさし下して青海原を
探り得てのち因をを生て次よ大名持神をう免りみ
まのふむまお正ほるあはしと有る都よ古傳よ合
ざる詞書あり此程此博士さちの信友云美多麻は靈を
何とてかく古傳を知ざりぬむ。信友云美多麻は靈を
尊びぬ依詞布由を震ふ此義よて神此靈の威を震ひて。

殊更よ幸ひ給ふを辱れみ稱へて美多麻能布由とは云
はる也。天皇の御魂は申候も凡人の布由布留同言ふは
證む古事記明宮段に歌ふ大雀佩せる太刀本於る死末
布由とを免る布由也。布留と同言よて大刀を揮依状を
いず也。布由布留同言ある由也。はと神靈も布留と云る
事ハ神の出行も供奉するを振奉布理出奉れ也。古記をも
よ見えと也。其を多くは神輿も於きて云依如く聞也。免
れど言此本は神靈は威震ひ給へる由を畏み稱ふる也
也。大鏡よ春日は大神の事を帝去北京よ遷し免給ひて
をはと近くふ也。奉也。大原野と申し。お布も近くをる。

又ふ也。奉也。吉田と申て御座は免也。此吉田は明神也。
山蔭の中納言はふ也。給するぞかし。也も見えと也。後世
列もフルといふ言のあるも威震ふ意あり。まゑフルマ
ヒと云もフルを活らせと依詞よて。安康紀よ威儀を
免る也。叶。万葉三卷大伴家持卿の歌。丈夫之心振起
ひて聞也。劔刀腰爾取佩梓弓。鞞取負而天地與彌遠。長爾萬代爾如
此毛欲得憑有之皇子乃御門乃云く。也を免る。心振起も。
心震ひ起ふ也。布理を布留比の約する也。今俗よも心
おど云ひま威震ふおども云也。はと雅言よ。ふ也。さ
けふ也。は牙。おど云ふ布里ぬ。殊更よ心はふる由也。此
外よふり某也。云布里ぬ。魂も布留布。布留比。布里。布留
ふ。此意あるが猶あり。古ま魂も布留布。布留比。布里。布留
をいずると其意は牙は牙よ。相同じ。死字も思ふは。天

武紀小招魂を美多麻布里と訓み臨時祭式よ鎮魂祭を
於富牟多麻布里と訓るも古言よて天皇の御魂此威震
り給ふばく奉仕依由の稱をさそ思たる也今云此事を
鎮魂祭の下よ注斯て布留比此本語は布留よて比布閉
ふを見るべし注を活用く辭あるを布由とも云子依よ依てルとユとを
殊よ親しき
音ふ美多麻乃布由云依あるばく曾根好忠集ふ暇無
みうひ形支身は牙急ぐの如御王のふ也と宜も云けり
清輔朝臣奥儀抄小此歌を擧て歳終よハキタマ亡魂を祭りて
恩徳を報玄とて御魂の冬といふ謂也依荷前祭ありと
云まことるをいかに但し昔を年終小荷前使を立て定

まれる陵墓小幣帛を奉られ又如ばても年終よ祖々此
靈祭に依例ありけむ其祭を御魂の布由と云べし由
如也其祖々此靈の布由蒙らむと依依意あり好忠主
の歌も然もやと聞也げあり清輔朝臣のフユを冬の義
と心得られとるを誤あり
○今云御靈此布由てふ言を布由をまよ布惠とも有れ
む前よ谷川氏の瘞也と解依よとりて有しうぞ此説
よ依ばく○皆有効驗ハ療病方禁厭法の皆効驗ある由
あり其療方ハ大同類聚方神遺方如とよ載と依方等よ
て彼恩頼を蒙れる百姓の家よ傳をまをるを聚られと
依物と見えとゆ平城天皇紀大同三年五月の下よ此書
を御撰ありし事を載さまるとるが其処
命小依て成まる由見えとり委くは此書此附考ふ論へ

皆平復如故。と有を以て知候し。癸十言と云。呪文を唱へ
よる事を通え。菅席蜀狗
おど古意よ叶ひて聞ゆるを。下よ云如く。大名牟遲。小名
牟遲。神を外國よ往來まじ神おれむ。彼神とちの傳へ
給ふるが遺れる。ちて此術を行ふ者を巫醫といふ。論語
法を通えと云。ちて此術を行ふ者を巫醫といふ。論語
小人而無恒。不可以作巫醫也。何依是也。此を巫と医と
を非あり。其を汲冢周書と云物よ。郷立巫醫。具百藥。以備
疾災。畜五味。以備百草也。云るをもて。巫と医を二。あらぬ
事を知。ちて漸くよ。呪術をば次小れして。藥を服えむる
事を專と爲る者も出來し故よ。周と云し。代小れして。官
を立依よ。巫を醫を別小せ也。其を周禮を見依よ。巫の外
小醫師と云官の也。掌醫之政。令聚毒藥。以共醫事。と云
ひ。まに疾醫也。云有る。掌養万民之疾病。と見えと也。かく
別よ

立ある故よ。前の如く巫彭。巫咸。おと称ふこと止みて。春
秋左氏傳。おどを見るよ。医を業をば。医緩。医和
おど云ふ事也。其後隋と云る代とれりて。古を巫と醫ハ
一。おど也。故案よ依れるを見えて。尚藥局よ。呪禁博士。呪
禁生。おど云を立て。醫の次よおき。呪禁博士と云ぐ。呪禁
生よ。呪禁祓除。おど此術を教へる。病人ある時を。醫と共
小預也。唐を云し。代此令も。是小効牙也。と見也。此等のよ
と委くを
唐六典といふ書。儲まに皇國を。右此如く。二柱。神とち。療
病方と。禁厭法と。を始給へる。正き傳の有ぐ上よ。孝徳天
皇此御代也。唐制を用ひて。官を置れし時よ。此制の古
小符へ。依事を所思。看せ依事と通えて。典藥寮。醫師。醫

の截葉を一夜屋棟に晒して用ふと云。水腫病の葉を煎
る水は流川の水を流ゆ。随ひ汲て用ふと云。類今數
千尽にべくも非び。皆其如。漢土にて醫方書此祖と云る。
傷寒雜病論も。甘爛水法。燒禪散方。あどは。禁厭あどを
は知らばやも。然らば病も禁厭と云ふ。然らば藥を用ひ
禁と其驗の互ひ似ると云のみ。其異あるあどを。譬へば
敵を平治する。説客を用ふる。と兵器を挙て服ハしむる
との異。例が如し。其藥を氣味を性と各々異ひて。其
能異あまむ。其往所も異ひて。方法と病證と。各々符あ時
を。直よ某くの病ある所。向ひて攻破り。或は人々身
固。有る神氣を佐けて。追散去れ。兵をもて敵を挫ぐ。
とく似たり。あど攻撃の葉を用ひて。驗あど。後。補ひ
の葉を用ふる事。も。兵を挙て敵を平治する。後。仁慈を
施して安む。あど似たり。敵とし云。予。兵器を用ふべき
物と。此み思ふを。豈良將を。し。も言む。や。病も藥字のみ用
ふるを。豈良医。是みれ。此の二柱神の療方。呪法。をの秘て。
としも言む。や。

始給する恩頼る依る事よぞ有る。あ。あ。下。注。ふ。○作
始酒之神也。あは私記ふ。少彦命。是造酒神也とあ。此を
決えて古傳の遺れるあ。但し是を。前。須佐之男。大
神。此。遠呂智を斬給ふ處。酒を醸。あ。給する事見。とま
ども。彼處。其事。此見。と。始。あ。そ。有。れ。少。毘古那。神。を。
天地初發の時。りの神。よ。坐。む。い。を。早。く。始。置。給。へ。る。故
了。彼。大神。も。其。法。字。知。看。して。釀。し。米。給。する。れ。あ。る。し。石
戸。段。よ。大。御。神。此。御。詔。よ。如。尿。醉。而。吐。散。と。あ。そ。を。詔。する
を。以。て。も。酒。造。る。事。の。い。と。早。く。有。し。こ。を。知。べ。し。古。事。記
裡。書。ま。と。本。朝。月。令。小。引。と。る。日。本。決。釋。よ。應。神。天。皇。此。御
代。を。り。以。往。よ。を。釀。酒。此。道。を。知。ざ。り。と。云。あ。と。有。ま。ど。
其。を。彼。卷。論。は。て。崇。神。天。皇。紀。よ。高。橋。連。活。日。を。云。人。天
ふ。を。見。べ。し。

皇よ神酒を獻_レて。此神酒ハ。吾御酒あらば倭_{ヤマト}の
主_ミに釀_{カミ}し御酒。幾久_{イクヒサ}と歌_{ウタ}する大物主は。大名牟遲神
の和魂_ニに御名あるを。下_シに見_ミゆ依_ヨ如_ニく_ク。少毘古
那神と御心を合せて。藥を定_サ給_{タマ}する事を_{コト}及_キて。共_ニに係_{カケ}
て稱_{ホト}せる_{コト}依_ヨ依_ヨ。○久斯神ハ。神功皇后_ニに御歌_{ウタ}ふ。此御
酒ハ。吾御酒あらば。久志能加美_{クシノカミ}常世_{トコヨ}坐_{イマ}石立_{イハタ}少御
神_{カミ}の云_ク。を御詠坐_{ウタ}る久志能加美_{クシノカミ}は酒之神_{サケノカミ}也。其_レに横
井_{ヨシ}千秋_{チウキウ}説_セよ。久志を酒_{サケ}に本名_{ホノナ}よ。應神天皇_{オウジン}に大御歌_{オホミウタ}よ。
須_スく許理賀_{コリガ}迦美斯_{カミシ}美伎_{ミキ}邇_ニ和禮_{ワレ}惠比邇_{ヒニ}祁理_{ケリ}許登_{コトナ}那具志_{ナグシ}
惠具志_{エグシ}爾_ニ和禮_{ワレ}惠比邇_{ヒニ}祁理_{ケリ}と_ル二_ニに具志_{グシ}也_也。

上_ウを_レ連_レる言_{コト}何_ニち_テ御酒_{ミウ}白酒_{シロウ}黑酒_{クロウ}也_也云_ク伎_キは。此_{コノ}久
志_{クシ}の約_{ヨク}れる名_ナあり。其_レを佐_サ氣_キとも云_ク。亦_モ名_ナよ。縣居_{ケンキ}大
ば心_{ココロ}に榮_{サカ}ゆる故_ユの名_ナ有_ルて。佐_サ加_カ延_{エン}を言_ク依_ヨを。案_ケ然_ニる説_セハ
の約_{ヨク}に_レ依_ヨる也_也。と有_ルる如_ニし。を言_ク依_ヨを。案_ケ然_ニる説_セハ
也_也加_カし。但_シし加_カ美_ミを神_{カミ}よは非_ヒ也_也。上_ウありを云_クる也_也。儲_{タケ}ま_と
師_シ説_セよ。契_ケ冲_{シム}を奇_ク之神_{カミ}ありと云_ク。茂_モ縣居_{ケンキ}大人_{オホタニ}を奇_クハ用
語_ゴあれむ之_レを云_ク。依_ヨらば。藥_{クシ}之神_{カミ}也_也。須_ス理_リの約_{ヨク}志_シ也_也。
と言_ク。信_{シノ}よ奇_ク之_レと云_ク。然_ニる也_也。は_レ藥_{クシ}之神_{カミ}と云_ク
むも然_ニる也_也。正_シし死_シ由_ユありと有_ル也_也。然_レれど依_ヨらば。千秋_{チウキウ}
と云_ク。説_セよ。依_ヨらば。是_レよ就_スて思_シ牙_バ。酒_{サケ}を久_ク志_シを云_ク。は。や
る説_セを信_シぐと_ル。是_レよ就_スて思_シ牙_バ。酒_{サケ}を久_ク志_シを云_ク。は。や
りて藥_{クシ}と同_ト語_ゴあらむ。其_レを酒_{サケ}はもと病_{ヤマト}よ久_ク須_ス琉_{リウ}と_ル。

造り給ふるよは非祓ども。久須理てふ名也。既病を治
は物の名とありて後、酒をく病を治し、心を和は物
ある故よ。久志てふ名を專と負けむ。久須理の約り。上
引さる應神天皇此御歌よ。許登那具志惠具志とあるは。
師説よ。事コト和酒エグレ咲酒よて、飲ク飲クて諸此憂事ウキコト哀事カナシキコト此和ナガさむ
酒クレおもあろく咲エミサカ榮カゆる酒クレと云意ぞと言れし説を思ひ。
猶季くを彼卷よ注をを見べし。荒木田久老の區志考と
云物よも上引さる高橋連活日が哥を此御哥とを引
て大汝少彦名、二柱神の酒を造初給ひてしをり。藥神
と申奉り、藥神と申奉るをり。療病方を定むとは舊辞よ
語り傳りしあるべし。漢因此言よも酒を百藥此長と云
る言の何ゆをも思ひ合して云は、二神を医の法
を始さるよを非と為し、依説を此み言むと為さる書ありけ
いふ物むいと異り依説を此み言むと為さる書ありけ

已其在下よも往くはと漢土よて、藥此始を酒よて。上古
辨ふるを見るべし。はと漢土よて、藥此始を酒よて。上古
は是を用ひて、病を治せると弘免て、草根木皮、此種
種此物字、用ふ事とあまゆも思ひ合ふべし。然るにま
がて酒醴の事あり。周礼、天官酒正職よ。辨、四飲之物、一曰
清、二曰醫、とありて、疏よ、清醴、清也。醫者謂釀、粥、為醴、と見
え、集韻よも、醫、濁漿也。やも有る。漢の上古も、今用ふる藥
を、おく、專と酒醴を用ひて、病を治せる故よ。其後品々の
藥を、知て用ふる人、醫と云こと、あまゆと見ゆ。盤と
も、作む、も、巫の始、とる業、あまゆ、れり。礼記よ、酒者所以
養、老也。所以養、病也。といひ、素問の湯液醴論よ、古酒を
用ひて、病を治せる事、見え、其湯液と云を、清酒のこと、醴
醴と云、濁酒を云、已、彼、因、此、酒、を、彼、因、人、此、造、始、ある、も
ほ、ま、其、や、が、て、此、あ、依、神、の、ち、の、御、靈、よ、依、て、あ、依、事、を、云
も、更、あり、は、酒、を、病、用、ふる、事、を、弘、免、て、草、根、木、皮、を、湯
あ、ど、云、こ、は、酒、を、病、用、ふる、事、を、弘、免、て、草、根、木、皮、を、湯
用、ふる、事、を、直、し、其、主、と、る、藥、の、名、を、と、り、て、負、と、依、物
とお、ぶ、也、此、湯、字、を、あ、ま、ゆ、某、藥、を、煎、さ、る、湯、也、と、云、と

心得むを深く古を考ふ。此を彼二柱神の彼因乎往來ユキカヒる謬と思ふ。如何有む。志給へ依故。其道も自然に傳はまる所以をよそ所念オボむ。然るを後世に薬師ども漢籍に依て彼因風に醫術をむ。且く知まると。鑿の眞道を知まよ人をば。いまど聞べ。其は神道を知よ。ゆゑに。鑿道に本ありけ。抑世間の抑世間のく神態よ。四季晝夜に往來。世乃治乱。風雨映冥のみ。あから。人此現。為事。皆神の御心。漏る事。あ。此を師説よ。人を譬へば。人形。此如く。神を人形を。あ。人此如く。と云れ。さる如く。ある中。よ。も。鑿道は。別。神道を。明。小。知。辨。へ。交。は。得。有。其。本。を。務。免。て。道。を。成。さ。む。と。思。ふ。ま。じ。き。道。あり。ぬ。也。人。を。此。此。二。柱。神。の。御。靈。字。常。に。祈。願。奉。る。は。き。事。よ。あ。そ。世の鑿師とちを。諸越に神農氏と云るを。医道の祖神と。齋くことあまぎも。彼人を医薬の術を始免さる。は。非

ざる多や。此事別よ記せる物あり。○因ふ云ふ。大社志。狩野永雲と云人。大神と。鼻の高くある草を賜。ま。る。事あり。い。を。珍。奇。き。事。よ。あ。そ。

○門人久保田細根云ふ。此に十八の巻。花ぐはし。櫻の板。小。ち。に。密。米。て。洽。祢。と。世。小。薰。ら。志。免。む。と。勞。於。之。者。は。百。志。ぬ。れ。美。濃。因。惠。那。郡。福。岡。村。に。古。く。よ。に。住。居。せ。る。安。保。正。員。ま。と。同。郡。坂。下。村。に。世。に。家。居。る。吉。村。時。安。と。二。人。あ。依。が。吹。渡。る。風。の。姿。ち。び。小。速。く。は。咲。お。て。あ。依。事。必。有。於。る。字。初。帙。よ。に。次。に。花。の。色。香。め。て。に。合。ひ。て。か。く。美。を。し。ぬ。は。句。ひ。出。ぬ。依。り。年。



和
田
縣
縣
令
大
印

和
田
縣
縣
令
大
印



美... 出... 風... 知... 野... 古... 林... 田... 縣... 令... 大... 印

